

笑う門には
ふくしあり



写真の花は住民の手で植栽されたハマギク。花言葉は“逆境に立ち向かう”。

令和8年3月11日

社会福祉法人 南三陸町社会福祉協議会

はじめに



この資料は、南三陸町社会福祉協議会が、東日本大震災とそれに伴う津波による被害の発生から現在までの15年間にわたる、地域福祉を通じた復興・地域創りへのコミットメントと成果についてまとめたものです。いわゆる活動報告書ではありません。なぜなら、通常なら表立って文面や図表にして公開しないような要素も含めて、むしろそうした要素にこそ本質的な知見が宿っているという想いをもちながら創ったものだからです。

全国の社会福祉協議会の仲間のみなさんをはじめ、行政・NPO・民間企業・民生委員など地域福祉に関わる方々にご覧いただきたいのはもちろんですが、「福祉」というものについてよく知らない一般の方々や、福祉について学びたい方、将来地域福祉の分野で働くことを考えている方などにもぜひ手に取って読んでみていただきたいです。

壊滅的被害を受けた地域で南三陸町社会福祉協議会が地域福祉の担い手として何をしてきたか——それを振り返ることは、非常時対応という点だけでなく、平時における地域福祉の仕組みをどう整えるべきかという現代的な課題の解決のヒントを得る上で有益です。どういった課題に直面する中で、どういった思想・計画に基づき、どういった人たちが、何を感じ・考えながら、どう課題を克服してきたのか。そしてそれが今を生きる私たちの日常生活に、あるいはいつか自然災害の被害を受けるかもしれない地域での復興・地域再生の取組にどう生きるのか、こうした多面的な観点に込められた内容がこの資料に含まれています。

社会福祉協議会による地域福祉が、復興のみならず、その先の地域創り全体に果たし得る役割・機能にはとても大きなものがあります。ときにそれは、定型的な意味での「福祉」の範疇を超え、地域そのものや住民の心の復興に対して、他の団体ではなし得ない効果を発揮できる。この15年間の実践を通じて、私たちはそう感じています。この資料は、そうした地域福祉の無限の可能性を実証するものでもあります。

最後に、この資料は、復興庁の「令和7年度「新しい東北」復興ノウハウ講演会等実施業務」における語り部団体ハンズオン支援を受けて制作されました。つまり私たちは、自身が属する社会福祉協議会を“地域福祉の語り部”と見立てた上で、町の復興過程における私たちの体験・記憶や地域福祉にかけてきた想いを、地域や世代を超えて語り継ぐべき伝承資料と位置付けて、この資料を創りました。「南三陸町社会福祉協議会は“地域福祉の語り部”」という観点は、私たち自身にも色々な気づきを与えてくれました。そうした機会を提供してくれた復興庁への感謝の気持ちを添えて、この声を皆さんにお届けします。

令和8年3月

社会福祉法人 南三陸町社会福祉協議会



草刈りコミュニティ

伝えたいことば。

住民による当事者目線のちいき創り

目次

- P01 はじめに
- P03 メッセージ
- P04 PART-1：私たちの町と社会福祉協議会
東日本大震災からの歩み
- P11 PART-2：復興の歩みに沿った南三陸社協の取組
-- 「仕組み」創り
- P15 PART-3：復興に寄せて
-- 私の経験とメッセージ
- P30 取組の成果
- P33 おわりに。『みんなの想いを乗せたことばたち』
～知見を活かし、社協の枠を広げた実践～
- P35 参考資料：「仕組み」の日常運用と使用アイテム



ころちゃん(社協)・オクトパスくん(町行政)
「車の両輪のように協働隊です」

南三陸町社会福祉協議会との15年

南三陸町 町長 **千葉 啓**^{ひらく}



平成23年3月11日に発生した東日本大震災により、本町では多くの尊い命が奪われ、町全体が甚大な被害を受けました。私たちの日々の生活が大きく変化していく中、これまで国内外からの多くのご支援をいただき、復旧・復興事業を進めてまいりました。特に被災者支援を含め、南三陸町社会福祉協議会とは、発災直後から共に復興の歩みを進めてまいりました。この15年の歩みに感謝の気持ちを込め、本稿を記します。

本町では、震災により全住戸の半数以上が全壊等の被害を受け、多くの町民が仮設住宅での生活を余儀なくされました。慣れない土地で慣れない人たちの生活は様々な課題を生じさせました。こうした背景を踏まえ、町では被災者の生活を支援するための被災者生活支援センターを設置し、その運営を社会福祉協議会へ委託しました。ここでの各種活動こそが、社会福祉協議会を中心とした被災者に寄った支援の原点であると捉えております。

震災直後は、支援員として被災者を支えるのも被災した町民でした。同じ被災者でありながら、町民のストレスを受け止める役でもあり、かなり過酷な状況だったことは想像に難くありません。それでも、連日の訪問や声がけなど、住民目線で支援を続けたことで町民との信頼関係を築き、支援員は被災者の支援に欠かせない存在になっていき、地域

コミュニティの再構築にも寄与するものでありました。このような取組みが評価され、先般復興庁より令和7年度「新しい東北」復興・創生の星顕彰を受賞されました。このことは、全国社会福祉協議会の手本となるものであり、町としてもとても誇らしく思います。

時間の経過とともに支援のステージは仮設住宅から災害復興住宅へと移りましたが、町では引き続き社会福祉協議会に被災者の見守り・相談活動を委託しました。身近に支援員がいることの安心感は住民にとって本当に心強いものだったと思います。支援員には、住民の話に耳を傾け、支援が必要な住民を町や関係機関に繋ぐ役割を担っていただきました。

令和7年度から被災者支援の取組は、町独自の支援事業にシフトしましたが、引き続き社会福祉協議会に業務を委託し、町民に対する支援を続けていただいております。行政だけではなかなか対応が困難なときでも、社会福祉協議会の人脈とパワー、そしてこれまでの経験を活かしたサポートは大変心強いものであります。今後におきましても、車の両輪の様に息を合わせ、本町の地域福祉の発展に努めてまいります。

平時からの横の繋がり、平時の時こそ福祉の充実。南三陸町社会福祉協議会の今後ますますのご活躍を御祈念いたします。

15年の歩み。

南三陸町社会福祉協議会 会長 **佐藤 徳憲**



この度、復興庁の『令和7年度「新しい東北」復興ノウハウ講演会等実施業務』語り部団体ハンズオン支援に採択され、ここに東日本大震災後の本会の取組み、職員の手記証言を「伝えたいことば。」に認め、報告することとなりました。関係各位の皆様には多くのご協力を賜り、心より御礼と感謝を申し上げます。

さて、本会においては平成23年7月19日より、南三陸町から被災者生活支援センター業務を受託し、被災者である地域住民を復興の担い手「生活支援員」として採用、多い時では200名を超える方々と共に復興に向けた取り組みを行ってまいりました。被災者が被災者を支援するゆえの困難や喜びを通し、住民目線の活動を続けた住民は、現

在においても社協事業(介護員や看護師、生活支援コーディネーター、ライフサポートアドバイザー、コミュニティソーシャルワーカー等)に関わる方や、各地域においてほっとバンク活動、まちづくりのリーダーとなりその手腕を発揮しています。

人材となった多くの町民の存在は、震災を経験した南三陸町にとって大きな希望となり、少子高齢化社会を生きる原動力となっています。そして、このような力を忘れることなく語り継ぐことも、我々被災地の大切な責務であり、職員一人ひとりがその想いを自分の言葉で綴っているのがこの記録であり成果です。是非多くの方々手に取って頂き、社協のフィールドで社協職員として語ったメッセージを心の目で読んでみてください。自分の組織、自分事に置き換え考える機会になれば幸いです。



PART-1: 私たちの町と社会福祉協議会 東日本大震災からの歩み

■南三陸町はどういう町?

私たちが暮らす南三陸町は、宮城県の北部、本吉郡に位置し、リアス式海岸が続く起伏の多い海岸線などで知られています。主な産業は水産業(カキ・ホタテ・ワカメなどの養殖)、観光等です。東日本大震災前の人口は1万8千人弱でした。

町は比較的小規模ながら、地域のコミュニティが強いことが特長です。南三陸町はじめ東北地域には「結(ゆい)」という習慣が昔からあります。これはひと言で言えば“相互扶助”の習慣で、血縁や金銭契約だけには頼らず、地域の人々が労力を出し合い、分け合って、お互いの暮らしや生業(なりわい)を支える仕組みのことです。

<結(ゆい)の基本的な考え方>

- 困ったときはお互いさま
- 労働を「貸し借り」するが、賃金は発生しない
- 順番に助け合うことで地域全体が回る
- 助けてもらった側は、後日、別の人の作業を手伝うことで返すのが原則(結返し)

<結はどんな場面で行われてきたか>

- 結は、個人では難しい・人手が必要な作業で力を発揮してきました。
- 農業: 田植え、稲刈り、屋根葺き替え、など
- 漁業: 漁具の準備、船の引き上げ、加工作業、など
- 生活: 家の建築、冠婚葬祭の準備、雪かき、など

私たちの南三陸町は元来、こうしたコミュニティの繋がりを大切に、住民同士で支え合ってきたのです。これは東北の風土に培われた、強く素敵な慣習であり、南三陸町社会福祉協議会の日々の活動の根本にも結の意識があります。

そして、この結に象徴される助け合い・支え合いの町民意識が、東日本大震災からの復興においても大きな力になったと信じています。

■南三陸町社会福祉協議会はどういう組織?

社会福祉協議会とは、全国の市町村・都道府県ごとに設置されている地域福祉の中核組織です(⇒組織図参照)。社会福祉法に基づく民間組織(社会福祉法人)でありながら、行政と密接に連携して活動する点が、大きな特徴として挙げられます。

<社会福祉協議会の主な特徴>

- 地域住民主体

住民、民生委員、福祉関係者、行政などが協力して地域課題に取り組む

- 制度と暮らしの「あいだ」を埋める存在
公的制度では届きにくい生活課題(孤立、見守り、生活困窮など)を支援
- 分野横断型
高齢・障害・子ども・生活困窮・災害支援などを包括的に支援できる体制づくり
- つなぐ役割(ハブ)
住民、ボランティア、NPO、行政、専門職を結びつける調整役
- 日常生活自立支援事業
判断能力が不十分な方々へのサポート、成年後見制度への支援等関係機関との調整

<代表的な事業>

- 地域福祉活動の推進(サロン、見守り、居場所づくり)、アウトリーチ事業
- 介護保険事業(通所介護・訪問介護・居宅介護)
- ボランティアセンターの運営や災害時の支援調整(災害ボランティアセンター)など
- 生活福祉資金貸付などの相談支援から日常的相談
- 福祉共育事業
年代や属性を問わず、生涯にわたり共に学び合う事業

■東日本大震災の発生と南三陸町社会福祉協議会に課せられたもの

2011(平成23)年3月11日金曜日の午後2時46分、東日本大震災(東北地方太平洋沖地震)が発生しました。

- 震源 三陸沖(北緯38度06.2分、東経142度51.6分)
深さ約24キロメートル
- 規模 マグニチュード9.0
- 最大震度 震度7(栗原市築館)
- 当町震度 震度6弱(南三陸町志津川・南三陸町歌津)

この災害により南三陸町の日常と姿は一変しました。

- 死者 620人(直接死600人(うち町民の方551人、町外の方48人、不明1人)、間接死20人)
- 行方不明者 211人(うち町民の方210人)
- 建物全壊 3,143戸(平成23年2月末日現在の住民基本台帳世帯数の58.6%)
- 建物半壊、大規模半壊 178戸(平成23年2月末日現在の住民基本台帳世帯数の3.3%)
- 半壊以上の計3,321戸(平成23年2月末日現在の住民基本台帳世帯数の61.9%)

震災被害が私たち南三陸町社会福祉協議会に突き付けた課題、それは、補助事業・委託業務といった元から（外から）与えられた仕事を定型的に実施するだけでは復興は前進できないという現実をどう克服するのか、そこで社会福祉協議会という組織がどういう役割を發揮できるのか、という問いでした。

■東日本大震災からの南三陸町社会福祉協議会の足跡

上記の課題に対して、発災から約15年間、私たち南三陸町社会福祉協議会は試行錯誤しつつも確かな足跡を残すことができたと考えています。それは下記のような独自の長にまとめることができると自認しています。これは、東日本大震災による被災とそこからの復興という大きく重い経験を、上述の結の力を基礎に推し進める中で培われ、鍛えられてきたものです（⇒後掲の活動年表参照）。

<私たち南三陸町社会福祉協議会の特筆すべき長>

①災害対応を一過性では終わらせなかった

東日本大震災後、災害ボランティアセンターの長期運営、外部支援団体・全国の社協との連携、仮設住宅・復興住宅での見守り支援などの取組を通じて、緊急期⇒復旧期⇒復興期⇒平常時をつなぐ支援体制を構築しました。つまり、災害対応を「特別対応」で終わらせず、平時の地域福祉に組み込み、社会福祉協議会としての活動の枠を広げたのです。

②「支援する側／される側」を固定しない

被災者自身が、ボランティア、見守り役、語り部などの地域活動を担うべく、被災者が支援する側にも立てるようになる過程を重視しました。これは上述の結との親和性が高く、住民主体の福祉を文字通り体現するものです。

③小規模自治体ならではの密度の高い支援

町の人口規模が比較的小さいからこそ、顔の見える関係、個別事情に寄り添った支援、行政・医療・教育との迅速な連携、町外避難者のケア（いわゆる「みなし仮設」）が可能であり、制度の狭間で取りこぼされる被災町民を出さない、だれ一人置き去りにしない福祉を追求してきました。

④実践知の発信拠点としての役割

南三陸町社会福祉協議会は、災害福祉の経験、住民主体型支援の方法、ボランティアコーディネート知見などを、研修・視察・報告書等を通じて全国に共有してきました。その1つの到達点が、2024年に開催された「小さな社協のこだわりフォーラム」です（⇒「小さな社協のこだわりフォーラム」の詳細についてはp.9～10を参照）。

以上の4点は、私たち南三陸町社会福祉協議会が「被災地の復興を担う福祉団体」という役割にとどまらず、全

国・世界の福祉関係者や復興当事者の方々に実践上の学びやヒントを提供できる、1つの地域福祉モデルを創ってきたと自覚できると感じています。

■4つのキーワード:「あゆみ」、「こだわり」、「つながり」、「みらい」

復興過程における私たち南三陸町社会福祉協議会の歩みを端的に示す、4つのキーワードがあります。——「あゆみ」、「こだわり」、「つながり」、「みらい」です。これらは、先述の「小さな社協のこだわりフォーラム」において全国各地の仲間と共に確認し合ったものです（個々のキーワードの内容やキーワードの関係性などの詳細についてはPART-2でご説明します）。

前項で私たちの取組は「1つの地域福祉モデル」だと言いましたが、そのモデルすなわち南三陸町という被災地における福祉実践の「仕組み」の柱をなすものが、これら4つのキーワードであり、それぞれを端的に表現すれば下記の通りです。

- あゆみ「担い手になった被災者たち」
- こだわり「当事者性を持った関わり」
- つながり「あらゆる世代の隣にある“ふくし”」
- みらい「創意と工夫、つながる地域づくり」

■南三陸町社会福祉協議会のモデル（仕組み）の実践・運営を担った人たち

モデル（仕組み）を図表にまとめることは知の見える化と共有に大変有効ですが、その根本には、そのモデル（仕組み）を日々試行錯誤しながら歯を食いしばって実践し、血を通わせ、仕組みとしての有効性を自らの実践と協業を通じて証明してきたスタッフがいることを忘れることはできません。

そのスタッフは、コミュニティソーシャルワーカー（Community Social Worker: CSW）、ライフサポートアドバイザー（Life Support Advisor: LSA）、生活支援コーディネーター（通称SC）をはじめとする、南三陸町社会福祉協議会の地域福祉事業を担っている方々です。

- LSA…地域住民と同じ目線で被災者の日常の見守りや生活支援・相談業務を行う。
- CSW…多職種・多機関連携により、住民の課題解決に向けたアウトリーチを展開。
- SC…介護予防や、地域で生きがいを持って暮らすための住民伴走を実践。

南三陸町社会福祉協議会が培ってきた地域福祉のモデル（仕組み）を根本的に、かつリアルにお伝えするためには、これらLSA・CSW・SCの方々が何を考え、何を目指し、どういう苦労に挑み、そしてどういう成果・喜びを得ながら活動しているか（きたか）を知っていただくことが欠かせません。PART-3で、多くのLSA・CSW・SCによる手記・

証言をご紹介します。これらはモデルのチャートと同じくらい大切な情報であり、いわば、南三陸町社会福祉協議会のスタッフが「語り部」となり、町内外の同志の方々や、次代の町の福祉を担う若い世代の方々に伝承すべき物語（ストーリー）なのです。

■活動拠点「結の里」とその設立・運営に参画された関係機関との連携

東日本大震災では多くの町民が家族や親しい人、住まいを失い、長年住み続けてきた地域でのつながりを失うことを余儀なくされました。それでも、避難所や仮設住宅では、町民のみなさん自身が「お互いさま」という支え合い・助け合いを実践し、新しい暮らしとつながりを築いてきました。高齢者の在宅生活を支える介護サービスを提供するとともに、子どもから高齢者まで、町民の誰もが気軽に集い、地域でのささえあい、助け合いが広がっていくような「み

んなの居場所ささえあいの拠点」として、2018年4月1日、「結の里」が設置・開所されました。あえて言うならば、伝統的な「貧者救済」的な意味合いでの福利拠点ではなく、多くの町民が老いも若きも障がい者も健康者も共に集い、心の壁のない町づくりを進めていくための拠点です。

みんなの居場所である結の里の開所に向けては、町内外の多くの関係機関（例えば建築建設・行政・学識経験者・NPO等）が連携し、当社会福祉協議会がプラットフォーム機能を発揮したことで、住民や専門家らの声を反映しつつ開所を進めることができました。町民が多くの関係者・関係機関と繋がる上でとても有意義なプロセスでした。

結の里は南三陸町民みんなの居場所であり、ここで交流しながら活動を担っていくのは、町民自身です。私たち南三陸町社会福祉協議会のスタッフは、ここが新しい地域のつながりの要・発信源となるよう、町民の活動を広く支えていきます。



仮設でのクラブ活動による作品集

事業紹介

復興過程で南三陸町社会福祉協議会が創意工夫を凝らして生み出してきたユニークな取組です

地域の声が「形」になったあれこれ(事業)

■その1 仮設住宅での暮らしの中で。

NO	事業名	事業概要
1	みんなの作品展	仮設住宅入居時に趣味や特技を生かす場づくりを実施。その成果として作品展を開催。
2	クラブ活動	住民のやりたいことを集会所でのクラブ活動に。
3	南三陸町合同再会サロン	震災後、町外で暮らす方々の交流会を定期的に開催。
4	戸倉同郷サロン	震災後、戸倉地区住民の集いの場として戸倉同郷サロンを開催。
5	カフェ あづま〜れ	歌津老人福祉センター駐車場を会場にテントカフェを開催、住民の息抜き交流の場に。

■その2 結の里が完成して。

NO	事業名	事業概要
1	えんがわカフェ	いつでも誰でも気軽に立ち寄って、飲み物とおしゃべりを楽しめる100円カフェ。
2	みんな食堂	実行委員が中心となり、手作りランチを300円で提供。テイクアウトやデリバリー（宅配）も実施。
3	走らない大運動会	小さな子どもから高齢者まで誰でも参加できる走らないからおもしろい運動会。
4	おさがりBOX	家庭で使用しなくなった町内中高生の制服を再利用。環境に配慮、家計の負担軽減にも。
5	ほっとバンク事業	地域で相互に見守る住民ボランティア登録制度。自分のできる範囲で「無理なく」「楽しく」「長く」活動する心の貯金事業。
6	ほっとバンク協力店事業	町内外の事業所等が、地域の見守りと協働の支え合い事業を展開。
7	救急医療情報キットいのちくん事業	有事への備えとして、自身の医療情報等を救急医療キットで保管。近隣、民生委員等と共有。
8	SOSフラッグ事業	救急医療キットいのちくんを所持している一人暮らしの方を対象に、見守り・安心の一助として、フラッグを配布。近隣、民生委員等と共有。
9	緊急連絡先カード事業	自宅内（自身の目につく場所）に掲示し、有事の際に緊急連絡先につながるためのカード。近隣、民生委員等と共有。

10	虹のバトン事業	公的なサービスでは対応できない生活支援（掃除・食事支援・通院付き添い等）を住民同士で構築。
11	福祉共育事業	年代を問わず、全ての人がありたい暮らしが実現できるよう、互いに支え合うことを学び合う。
12	防災共育事業	年代を問わず、災害や減災に対し必要な備えや、災害時の助け合いの大切さを学ぶ。

■その3 そしても、住民とともに創るワークショップの数々(一例)

ヨーヨーキルトでのれんづくりやペナントづくり	コロナ禍のフレイル予防、関わりへの構築に向けた手芸活動、『結』のペナントは町内全ての小学校へ寄贈。
能登へ送ろう応援プロジェクト	能登半島地震で被災された方へ、募金やメッセージ、バンダナやアームカバーを製作し現地へお届けした。
男のDIY教室	男だけの木工時間、モクモクと。
多肉植物ワークショップ	多肉の寄せ植えを。
ものづくりワークショップ	住民先生の指導により、様々な楽しみづくりを実施。

■活動年表 (2025年2月5日現在)

	震災前	東日本大震災発生 2011.3.11～ 平成23年	2012 平成24年	2013 平成25年	2014 平成26年	2015 平成27年	2016 平成28年	2017 平成29年
法人本部	主たる事務所 福祉の里 (他、老人福祉センター)	本所壊滅 老人福祉センターを拠点化	→	→	→	→	2/16～ 総合ケアセンター内に 社協本部機能移転	→
	年度初め職員数	職員数 64 正職員 23 その他 41	職員数 63 正職員 19 その他 44	職員数 86 正職員 17 その他 69	職員数 78 正職員 15 その他 63	職員数 89 正職員 15 その他 74	職員数 81 正職員 12 その他 69	職員数 69 正職員 13 その他 56
	全体運営 経理・人事 団体・権利擁護 相談支援・資金等	福祉避難所事業受託 (利用者延べ2,589人) 災害ボランティアセンター 開設 (15万人以上) 被災者生活支援センター受託 滞在型支援員配置事業受託	9/24 滋賀県大津市 社協友好協定締結 (長期職員派遣終了) 11/24 南三陸町福祉まつり 関係機関 支援団体協力のもと実施				再開(1世帯当たり) 社協会費1,200円 共募募金700円	4/1～ 災害公営住宅常駐生活 支援員配置事業受託8名 随時増員最大15名 7/1～ 生活支援コーディネーター 事業受託(1名)
介護保険事業	通所介護2事業所 しづがわデイ うたつデイ	うたつデイ(通常型) 6/20から再始動 ★福祉避難所運営	→	→	→	→	→	→
	訪問介護1事業所 まごころ	3/21～再始動 老人福祉センター内	→	→	→	→	→	→
	訪問入浴1事業所 湯とり	4/27～再始動 老人福祉センター内	→	→	→	→	→	→
	福祉用具1事業所 南ざんりく	老人福祉センター内	→	→	6/30事業廃止	→	→	→
	居宅介護1事業所 南三陸居宅介護	3/18～再始動 災害ボランティアセンター内	→	→	→	→	→	総合ケアセンター内 →
災ボラC	通常のボランティア センター業務	3/26～ テント・コンテナ活用 災害ボランティアセンター開所		→	→	3/15 閉所に伴う感謝の集い (V15万人以上) 4/1～通常のボランティア センター事業再始動	→	→
支援C		7.19～ 被災住民を担い手に 被災者生活支援センター開所 緊急雇用事業 救急医療情報キット	MAX 巡回訪問支援132人 滞在型支援員109人	仮設住宅 2,195戸5,829人 地域支え合い体制整備事業	→	4/1～ 支援員卒業生及び全国の ボランティアに背中を押され 「ほっとバンク」事業開始	虹のバトン事業 (有償ボランティア)	1世帯を残し 仮設住宅解消の為 被災者生活支援 センター事業終了
LSA					入谷復興住宅51戸 名足復興住宅33戸 枳沢復興住宅20戸 被災者支援給付交付金	伊里前後復興住宅60戸 戸倉復興住宅80戸 →	→	中央復興住宅147戸 西復興住宅82戸 東復興住宅265戸 地域づくりのあれこれ (自治会地域づくり事業)
結の里								建設の遅れをプラスに 住民ワークショップ (年6回開催)

■組織図



総合ケアセンター南三陸



結の里

■総務課(地域福祉係)

結の里 南三陸町志津川字天王山38番地152 Tel.29-6452 fax46-5158

伊里前復興住宅集会所 南三陸町歌津字伊里前325番地3 Tel./fax28-9752
 戸倉復興住宅集会所 南三陸町戸倉字宇津野50番地17 Tel./fax25-8856
 志津川東復興住宅第1集会所 南三陸町志津川字沼田14番地23 Tel./fax29-6811
 志津川東復興住宅第2集会所 南三陸町志津川字天王山38番地7 Tel./fax29-6198

会 員

一般会員
 賛助特別会員
 団体会員

執行機関

理事会
 会 長(1名)
 副会長(2名)
 理 事(5名)

議決機関

評議員会
 評議員(16名)

監査機関

監事会
 監事(2名)

事務所所在地(総務課総務係)

南三陸町志津川字沼田14番地3 総合ケアセンター南三陸2階
 Tel.0226-46-4516 fax0226-46-4013

(歌津事務所)

南三陸町歌津字枳沢28番地1
 Tel.0226-36-2955 fax0226-36-2959

■総務課 ・総務係 ・地域福祉係

■介護福祉課 ・居宅介護支援係 ・通所介護係(歌津、入谷、志津川) ・訪問介護係



歌津老人福祉センター

■介護福祉課

南三陸居宅介護支援センター

南三陸町志津川字天王山38番地152(結の里)
 Tel.29-6820 fax46-5158

南三陸町デイサービスセンターうたつ

南三陸町歌津字枳沢28番地1
 Tel.36-2955 fax36-2959

南三陸町デイサービスセンターいりや

南三陸町入谷字新中の町2番地
 Tel.46-1041 fax46-1042

南三陸町デイサービスセンターしづがわ

南三陸町志津川字天王山38番地152
 Tel.29-6910 fax46-5158

南三陸町ヘルパーセンターまごころ

南三陸町歌津字枳沢28番地1
 Tel.36-2955 fax36-2959

2018 平成30年	2019 平成31年・令和元年	2020 令和2年	2021 令和3年	2022 令和4年	2023 令和5年	2024 令和6年	2025 令和7年度	2026 令和8年度
支え合いの拠点 結の里新設	→	→	→	→	→	→	→	本所/総合ケアセンター 外事業所 ・老人福祉センター(介護) ・入谷デイサービスセンター(介護) ・結の里(介護・地域福祉)
職員数 63 正職員 11 その他 52	職員数 67 正職員 11 その他 56	職員数 63 正職員 11 その他 52	職員数 59 正職員 10 その他 49	職員数 65 正職員 10 その他 55	職員数 62 正職員 10 その他 52	職員数 63 正職員 9 その他 54	職員数 55 正職員 12 その他 43	職員数 52 正職員 10 その他 42
第1期 地域福祉活動計画 4/1~ いきいき百歳体操 事業受託(1名) 生活支援 コーディネーター 事業受託(2名)		視察の加速化 復興大臣・宮城県知事等 大津市社会福祉協議会 災害時相互応援協定締結			6/15~ デマンド交通事業受託	第2期地域福祉活動計画 住民お披露目会 10/25~26 小さな社協のこだわり フォーラム開催 (全国から350人を招く)	4/1~ 生活支援体制整備事業を 活用した高齢者見守り 事業受託(4名) (宮城県) 被災地コミュニティ 活性化支援事業受託 3/23 【みながかりの15年、 そしてこれから】新念 フォーラム開催	重層的支援体制整備事業 (アウトリーチ事業)受託
新設5/1~ (結の里内) しづがわデイ(地密) 総額272,586千円 借入60,000千円 独立行政法人 福祉医療機構 令和14年返還済	→		→	→	→	3/31とぐらデイ(地密)廃止 とぐらデイ跡地再活用 地域カフェオープン	→	5/1うたつデイ(地密)
→	→	3/31廃止	→	→	→	→	→	→
結の里内	→	→	→			→	→	→
→	→	→	→	→	→	→	→	→
→	◇コロナ禍のお茶の間 ワークショップ ◇ほっとバンク事業 及び協力店事業 ◇いのちくくん事業 ◇虹のボタン事業 全て継続		→	→	→	町行政の意向により 交付金による事業は 1年前倒しで事業終了	生活支援体制整備 事業を活用した高齢者 見守り事業受託(4名)	
オープニング イベント ・カフェ ・みんな食堂 ・イベント		・おさがりBox事業	・SOSフラッグ事業	→	7+5周年記念イベント	→	→	走らない大運動会 10回記念大会(仮称)

小さな社協のこだわりフォーラム概要

【開催日】 2024年10月25日(金)・26日(土) 【会場】 南三陸町ベイサイドアリーナ

セッション①「あゆみ」

<開会・セッションの位置づけ>

- フォーラム第1セッション「担い手になった被災者たち」では、南三陸町の被災者支援の全体像と設計思想を共有することが目的。
- 進行役は真壁さおり氏。登壇者は本間照雄氏(行政ボランティア・アドバイザー)、高橋一清氏(3.11メモリアル伝承館顧問/当時町保健福祉課)、三浦真悦(当時社協地域福祉課長、前事務局長)。

<背景(震災と地域状況)>

- 東日本大震災により想定外の浸水が発生、平坦地が乏しい沿岸の特性から集団移転や災害公営住宅への移行が不可避に。
- 二次避難所への町長メッセージ巡回など、町民と行政の相互励ましを早期から生まれた。

<支援枠組みの設計(本間氏の構想)>

- 宮城県内で早期に「被災者生活支援センター」を設置(南三陸町は組織的体制で構築)。
- 限られた資源を最大化する「三層構造」で、被災者支援から地域福祉へ段階的に接続。
- 支援員の三形態(巡回型・滞在型・訪問型)を導入し、町外・県外の避難者にも電話・訪問で広域対応。
- 「市民的専門性」を核に、被災当事者の共感性・生活者視点・地域知を活かす能動的な寄り添いを制度化。

<人材育成・運営の工夫>

- 被災者(高齢者含む)を支援員として育て、専門理論(バイスティックの7原則等)を分かりやすく伝え、実践と記録を徹底。
- 業務の「1分スタディ」で時間配分を可視化し、移動過多などを是正する組織改善を推進(CSR協力も得る)。

<具体的な生活支援の展開>

- 食の支援(管理栄養士と「ワンコインレシピ」)、ラジオ体操、長生き坂、縁側コンサート、デジカメ教室・ビデオレター等、地域文化と弱点の転換を活用。
- お茶っこ会で認知症理解を広げ、学会特別賞を受賞するなど、日常の場を福祉教育化。
- 被災者が担い手になる意義
- 支援員の当事者語り(漁業から支援へ)に象徴されるように、社会的役割の付与が自律と地域回復を促進。
- マニュアルに依存せず、現場から生まれた良い実践を共通セオリー化して所有感を醸成。

セッション②「こだわり」

<セッションの概要と趣旨>

- 南三陸町社協が13年間続けた「非常時目線を平時に生かす」実践を共有する場。
- 災害経験を地域福祉に活かす方法を議論し、行政・社協・住民が連携の重要性を確認。

<行政視点からの報告(及川真氏)>

- 仮設住宅は最大2,170戸、退去完了まで8年を要し課題は多様化した。
- 初期は自治会設立や集会所活用でコミュニティ形成を促進する必要があった。
- 中期以降は近隣トラブルや転居不安、孤独感が顕在化し支援継続が不可欠。
- 財源確保は緊急雇用創出事業を活用も雇用不安定で人手不足が深刻化した。
- 平成28年度に総合交付金創設、長期的視点での被災者支援が可能となった。

<生活支援員の現場経験(遠藤ゆかり)>

- 支援員は見守りと傾聴を重視し、SOSを出せない人を根気強く発見した。
- 主婦目線の細やかな対応で信頼関係を築き、課題解決に結びつけていった。
- 仮設生活ではノイローゼや交通手段不足、飲酒問題など複雑な課題が発生。
- 趣味活動や作品展を通じて住民の生きがいを創出し、交流の場を広げた。
- 住民主体のイベント運営を支援し、コミュニティ再生と自立を後押しした。

<みなし仮設支援と再会サロン(吉田透)>

- 遠方避難者を訪問し孤独感を解消、町情報を届けて安心感を提供した。
- 工夫として町長メッセージ動画や写真パネルで故郷との繋がりを維持した。
- 再会サロンを仙台・登米で定期開催し、避難者同士の交流を継続した。
- 支援員は繋ぎ役として故郷への愛着を守り、心の復興を支援し続けた。
- 学びは「人と話す力」、復興は建物だけでなく心の再生が重要である。

<主任支援員の苦悩と成長(芳賀裕子)>

- 支援員を束ねる責任に悩み孤独感を抱えるも、仲間へ頼る重要性を学んだ。
- チーム形成のためお楽しみ会や個人面談を実施し信頼関係を強化した。
- 訪問活動を継続し孤独死防止、住民との絆を深めコミュニティ再生を促進。
- お茶会を住民主体へ移行し自立を促進、支援員は伴走役に徹する姿勢を確立。
- 折れない軸は「住民のため」、平時の繋がりが災害時に命を守る基盤となる。

<地域団体の取り組み(鈴木清美氏)>

- おもちゃの図書館活動で障害児と家族の居場所を提供、全国連携で支援。
- 福祉健康まつりや遊び場づくりで障害の有無を超えた交流を実現した。
- 高齢者の生きがいづくりにグラウンドゴルフや書道教室を開催し活力を維持。
- 結の里を住民交流拠点として整備、縁側カフェで縁を結ぶ場

を創出した。

- 防災意識の重要性を再認識し、地域共生社会の構築が今後の課題となった。



歌津中学校生徒による発表

セッション③「つながり」

<セッションの概要>

- 南三陸町社協が掲げる「隣にある福祉」がテーマ。
- 中学生による地域福祉活動計画の朗読と実践者3名の事例報告を通じて、震災経験を平時の地域づくりに活かす視点を共有。

<震災と地域文化>

- 震災前の南三陸町では、近隣交流やお裾分けが日常で、「支え合いの文化」が生活の基盤であった。
- 東日本大震災で町は大きなダメージを被り、住民は避難所で不安と喪失感に苛まれた。それでも住民は希望を失わず、地域力を結集することができた。

<幸せの種まき>

- 社協が担った生活支援事業では、当事者視点を重視し、傾聴と共感を繰り返すことで信頼関係を構築。
- 職員は住民の思いに気づく感性を培い、この経験が地域福祉の実践へと繋がり、幸せの循環を生み出した。

<支え合いの仕組み>

- 支え合いは「横の軸の日常」と「縦の軸の人生」とで構築される。
- 地域での体操やお茶会が自然なケア会議となり、見守りを実現。障害や認知症への理解が広がり、他人事から自分事への関わりに変化し、暮らしの自立を支えた。

<“プラットフォーム”の役割>

- 地域課題は多様化・重複化しており、住民・社協・関係機関の協働が不可欠。
- 社協は結の里で縁側カフェを運営し、誰もが集える居場所を提供。多職種連携を進め、生活支援の調整やマネジメント機能を担い、横断的ネットワークを構築している。

<幸せの循環社会>

- 福祉は困窮者だけでなく全ての人に関わる営みであり、平時からの繋がりが非常時の財産となり命を守る基盤になる。
- 震災後はボランティア受け入れで人の温かさに触れ、住民の力が高まり、ほっとバンクなど主体的活動が広がった。

<実践者の声(大山たつ子氏)>

- 社協スタッフらは震災前から防災研修に参加し、復興には住民の力が必要だと学んでいた。
- 生活支援員として避難所を訪問し信頼関係を築き、仮設住宅でお茶会や交流イベントを企画して笑顔と繋がりを創出。現在は「みんな食堂」を運営するなど、地域の居場所づくりに貢献している。

<実践者の声(佐藤あや子氏)>

- 自分自身は津波被害を免れたが、被災者支援を通じて人との関わりを学んだ。
- 仮設住宅訪問で拒否的な住民とも粘り強く信頼を築き、生活支援を実施。男性向け料理教室や竹細工講座など参加促進の工夫を重ね、現在は民生委員として地域で見守り活動を継続している。

<実践者の声(菅原水緒氏)>

- 震災後京都から移住し、子供たちの学びを支える活動に携わった。
- 仮設住宅での学習支援から「学び場・つばき」を設立し塾運営を開始。子育て支援団体「みなはび」を立ち上げ町の魅力を再発信し、移住者としての葛藤を抱えつつも、地元住民の温かさに支えられている。

セッション④「みらい」

<セッションの概要>

- 本セッション(フォーラム最終日)は、「創造と繋がる地域創り」をテーマに開催し、震災13年の経験を未来の町づくりに活かすため、行政・専門家・支援者・社協が意見を共有した。

<ボランティアと継続的な絆(前・佐藤仁町長)>

- ボランティアセンター閉鎖後も絆を切らないため「南三陸応援団」を設立し、企業・個人との関係を維持。
- 震災後4年目には観光客数が144万人に増加した。

<復興公営住宅とコミュニティ形成(前・ジオ・プランニング塩路安紀子氏)>

- ジオ・プランニングが復興公営住宅の計画作りに関わり、暮らしの懇談会で入居者の顔合わせや情報提供を実施。これを通じ、住民の声を反映した設計が重要と認識した。
- 志津川東地区では中庭や菜園を設け、交流を促す設計を採用。福祉モール構想では「誰でも立ち寄れる場」を目指し、結の里の原型を作った。

<地域支え合い活動の展開(真壁さおり氏)>

- 検討会で住民主体の活動を試行し、ミニ運動会やみんな食堂、フリーマーケットなどが誕生。
- 社協職員、ライフサポートアドバイザー(LSA)らが連携し、住民の主体性や支え合いを重視しつつコミュニティ再生を支援した。
- 南三陸町の取組を全国に発信している。

<南三陸社協に期待される役割(高橋吏住事務局長)>

- 震災で社協の役割は否応なく「福祉課題対応」から「町全体の支援」へと拡大した。
- 緊急雇用事業で100人以上を新規雇用し、仮設住宅での見守りや交流を展開した。
- 当事者性を持つ支援員による、被災者の実情に応じた柔軟な対応が相互の信頼を築き、ひいては社協の存在意義を住民に示す契機となった。
- 2015年には「ほっとバンク」制度を開始し、個人(町民)や事業所が自ら見守りやイベント協力を担う「心の貯金」活動を推進。
- コロナ禍においてもこうした地域の支え合いを継続した。
- 2018年に結の里が完成し、カフェや朝市を運営。買い物だけでなく「出会える場」として機能し、見守りや交流の拠点となっている。

<未来への視座>

- 復興事業終了後も、災害に備えた「平時のつながり」が重要である。
- 南三陸社協は、能登半島地震への支援など、全国の被災地と連携し、これまでの学びや成果を活かす姿勢をもち続ける。



能登への災害ボランティア活動

PART-2：復興の歩みに沿った南三陸社協の取組 --「仕組み」創り

■南三陸町社会福祉協議会が創ってきた地域福祉の “仕組み”

PART-1で年表やキーワードと共にお伝えした、東日本大震災以降の南三陸町社会福祉協議会の歩みは、その時々での個別的な取組の寄せ集めではなく、実践に関するしっかりとした設計思想に基づき、約15年という期間をかけ、1つの「仕組み」として練り上げてきたものです。また、その内容は常に同じではなく、復興（地域の再生・町づくり）の進展段階と歩調を合わせて、必要な調整・修正を講じながら進められてきました。さらに、その主な担い手には多くの被災当事者が含まれていることも大きな特長です。その「仕組み」は全体として、4つの柱（キーワード）で表現することができます。（⇒ 下図・「仕組み」の見える化図①を参照）

- ①あゆみ（出発点）・・・震災直後からの実践の蓄積の起点です。“被災当事者が支援者になる”という発想や、「被災者生活支援センターの三層構造」（本間照雄氏提唱）など、後の全ての基礎となる設計思想がここで生まれました。
- （主な要素）
- ・震災直後の支援設計
 - ・被災当事者が支援者へと成長
 - ・設計思想（被災者生活支援センターの三層構造）

■被災者生活支援センターの三層構造



注：本間照雄氏作成

②こだわり（実践の哲学）・・・「①あゆみ」で培われた発想・思想が、日々の実践の「哲学」として表れ、関係者の中で認識されました。細やかな見守り・傾聴、住民の主体性を大切にした伴走、支援とコミュニティづくりの相乗といった点が中心的要素でした。

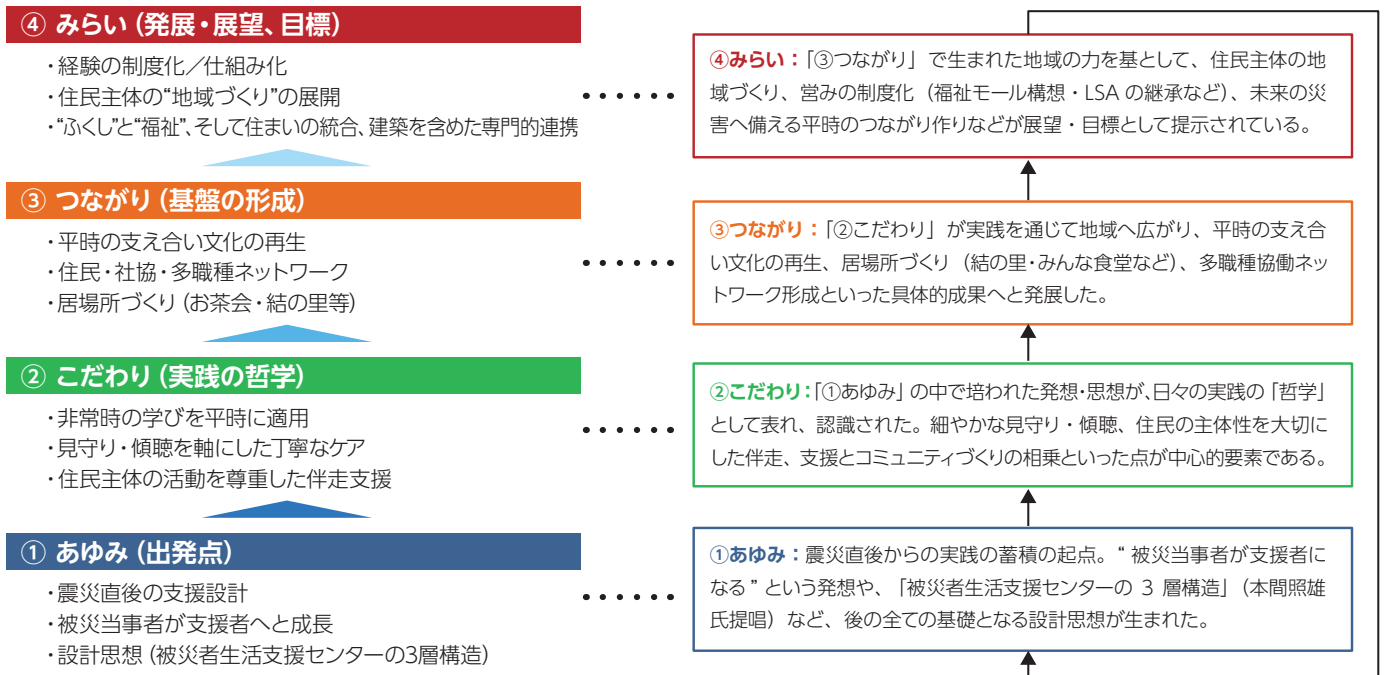
（主な要素）

- ・非常時の学びを平時に適用
- ・見守り・傾聴を軸にした丁寧なケア
- ・住民主体の活動を尊重した伴走支援

③つながり（基盤の形成）・・・「②こだわり」が実践を通じて地域へ広がり、南三陸町に元来からあった平時の支え

「仕組み」の見える化図①

下図に示す「あゆみ」、「こだわり」、「つながり」、「みらい」は、南三陸町社会福祉協議会が創り上げてきた地域福祉モデルの重要なステップを示すキーワードです。到達点や課題などを踏まえて各ステップを改善しながら繰り返していく【循環モデル】であり、その成果は非常時のみならず平時にも有効です。また、地域福祉の増進を通じて、被災住民の心のあり様や生活の張り合いにもポジティブに作用していく仕組みです。



合い文化の再生、居場所づくり(結の里・みんな食堂など)、多職種協働ネットワーク形成といった具体的成果へと発展していきました。

(主な要素)

- ・平時の支え合い文化の再生
- ・住民・社協・多職種ネットワーク
- ・居場所づくり(お茶会・結の里等)

④みらい(発展・展望、目標)・・・「③つながり」で生まれた地域の力を基として、住民主体の地域づくり、営みの制度化(福祉モール構想・LSAの継承など)、未来の災害へ備える平時のつながり作りなどが展望・目標として提示されています。

(主な要素)

- ・経験の制度化／仕組み化
- ・住民主体の“地域づくり”の展開
- ・“ふくし”と“福祉”、そして住まいの統合、建築を含めた専門的連携

上記の「仕組み」は15年という時間的な経過を通して、復興の進展に合わせて段階的に発展してきた面があります。しかし、必ずしも単線的に進むものではなく、その時々での到達点や最新の課題などに応じて実践を繰り返していく上での【循環モデル】として大変役に立ちます。具体的には――

- 被災体験(=①)が実践哲学(=②)を生み、その実践が本来の地域における支え合い(=③)を再構築し、そうして得られた地域の力を未来の地域社会の展望(=④)へ接続する。

【循環モデル】

- 被災体験(①)が実践哲学(②)を生み、その実践が本来の地域における支え合い(③)を再構築し、そうして得られた地域の力を未来の地域社会の展望(④)へ接続する。
- 定期的に目標と課題を更新することで、起点となる「①あゆみ」から「④みらい」への流れを繰り返す。

- 定期的に目標と課題を更新することで、起点となる「①あゆみ」から「④みらい」への流れを繰り返す。

■“仕組み”を支えたもの

南三陸町社会福祉協議会は社会福祉法人として町の復興に尽くし、上記のような“仕組み”を創り上げてきましたが、当初、「南三陸町のどこを探せば、被災者支援の担い手がいるのか?」や「長期にわたって被災者を支援してくれる人をいかに確保するか?」という非常に重くやっかいな課題を抱えながら活動を始めざるを得ませんでした。そのため、国の緊急雇用事業を活用して100人規模の町民を社会福祉協議会の「生活支援員」として登用し、行政や有資格支援者の手がなかなか回らない課題への対応に充てるという戦略な判断を行いました。支援員となった町民の多くは自らも被災者であり、福祉の基礎知識を持たない人が大半でした。その方々が、復興における最も重要な仕事の1つである被災者支援の最前線を担うことになったのです。

そうした中で、当協議会はこの15年間の取組を通じて、“非常時における被災者支援がその先の平時における地域創りの基盤になり得る”との考え方を常に念頭に置き、“非常時の学びを平時に活かす”ための地域福祉モデル(仕組み)の確立を追求してきたのです。その構築を可能としたのは、1つには周到に検討・設計された地域福祉戦略とその基盤たる確固たる地域福祉思想です。そしてもう1つ、町民から採用された生活支援員の方々が、日常的な活動における被災者・支援員の生の声や、心身の調子が気がかりな人の数と程度、毎月の課題・達成目標とその進捗状況などに関する情報を、所定のフォーマットにひたすら記録し、日々の被災者支援にフィードバックしてきたことの有効性も見逃せません。どれか1つが欠けても私たちの活動が上手くいくことはなかったと言えます。加えて、これらを欠かすことなく十全な仕組みとして機能させ、日常的に運用していくための活動拠点を、震災直後から、“アウトリーチ型支援拠点”(被災者のところへ直接出向いて心的ケアと共に必要な支援を行うこと)として設置したことも、当社会福祉協議会の取組の実効性を高める上で不可欠な要素であったと言えます(⇒P.13～14掲載の「仕組み」の見える化図②を参照)。

総じて、震災発生から15年を経たいま、私たち南三陸町社会福祉協議会がこれまで実践してきた地域福祉を通じた復興・地域再生への取組を振り返ってみると、“小さな社会福祉協議会であっても、確かな戦略性と事業継続に向けた適切なアプローチがあれば、非常時の被災者支援に効果を発揮し、復興に大きく貢献できる”と言えます。この資料は、それを事実に基づいて、かつ解りやすく(すなわち実践に供され得るものとして)説明・証明するものです。



仕組みの創設者「本間照雄氏」



当事者目線が成せる業！被災住民との心の通い合い、えんがわコンサート

「仕組み」の見える化図②

小さな社会福祉協議会であっても、確かな戦略性に基づく事業継続への適切なアプローチの仕組み（下図）があれば、非常時の被災者支援のみならず、地域の復興にも貢献することが可能です。被災者支援とは何を支援する取組なのか？ それは「生活」である。生活のプロである支援の担い手は、地域で暮らしてきた主婦をはじめとする

復興時の地域福祉を取り巻く課題

- ◇ 保健師等の専門職は忙殺状態
- ◇ 福祉施設は事業停止

- ◇ 福祉施設
- ◇ 復興には

担い手（生活支援員）による実践

- 町民（被災者）が担い手となり、生活支援員として、“3つの型”の支援を継続的に実施した
 - ▷ 巡回型支援員…基本形態
 - ▷ 滞在型支援員…本来なら見守られる側の町民から選任
 - ▷ 訪問型支援員…町外（みなし仮設）避難者を個別訪問
- “三段階の「しえん」”を展開し、その成果の上に南三陸町の地域福祉を発展的に再生した
 - ▷ 支援…茫然自失の被災直後は両手を出して支える [一時避難所]
 - ▷ 支縁…長い避難生活を支え合う関係（縁）作り [仮設住宅]
 - ▷ 志縁…生活再建（志）への歩みに寄り添う [災害公営住宅]
 - ⇒ 地域福祉…住み慣れた町で暮らし続けることを支える社会の再生
- 生活支援員としての役割を終えた人が、引き続き地域福祉や復興の取組に関わることができるよう、その受け皿として「ほっとバンク」制度を導入
- ほっとバンクは個人のボランティア活動を支援するだけでなく、非常時における「しえん」を、平時における町民同士の「支援」へと移行させていく機能も担う

課題

理論・

フィード

<成果

- ・ワンコイン
- ・デジカメ
- ・走らない
- ・えんがわ

支援員ひ物語(ナ

<地域福
あゆみ、
つながり、

結の里

2018年4月開所

LSA

町単独事業
(2025年4月～)

拡充

- 十分な福祉の知識を持たない新スタッフに対し、グループワーク等を支援員教育・研修を実施
- 日常業務では 365 日、毎朝、支援員同士での打合せ（カンファレンス）を実施
 - ⇒ 情報・事例のきめ細かな報告と共有
 - ⇒ 各スタッフの課題・悩みを合議で解決

汗と涙がやがて笑いへ

活動

被災者生活

“アウトリーチ型”*

*被災者のところへ直接出向支援を行う支援形態

注：南三陸町社会福祉協議会「小さな社協のこだわりフォーラム」セッション「担い手になった被災者たち」での本間照雄氏の講演内容等に基づき作成。



支援員訪問の様子



みんなの願いが形になった「結の里」



何気ない日常が幸せ

町民である。その“市民的専門性”を信頼することこそが、非常時における困難克服の原点。—— 下図の“仕組み”はこの原点の上に成り立っています。

職員は散り散り
年月を要する

○被災者支援とは「何を支援するのか？」と、根底に立ち返ること。
⇒ それは「生活」である。生活のプロは主婦ら。支援の担い手は身近にいるはず。

解決

指針

バック

事例>
・レシピ
教室
大運動会
コンサート 等

とリー人の
ラティブ)

社モデル>
こだわり、
みらい

「仕組み」の設計思想・戦略の策定

- 被災した町民が持つ**市民的専門性**への着目・信頼
 - ▷ 被災当事者としての共感力を発揮することができる
 - ▷ 専門職とは異なる、生活者の視点での気づきと寄り添いを実践できる
 - ▷ 地理学的・社会的に地域・人材を知っているという強みを活かせる
- “**三層構造**”による効果的支援（行政とCSW・有資格支援員だけでは復興に必要な人的資源が不足する中で、少ない資源を効率的に活かす）
- 地元町民を支援して、長期にわたる復興・発展を担う人財に育てる
- ストレンクス (strength)** の視点に基づく自立支援を通じて町民の潜在能力を引き出す
- 生活支援員自身が支援を通じ成長を実感する中で、プロ集団化していくための条件・環境を作り実践する
⇒ 三層構造の基礎部分の強化・拡充⇒ 支援の担い手の安定的確保

三層構造



非常時の合理性

拠点
支援センター
支援拠点

- 被災者の資源（人財）化 ⇒ 復興への高い志と生活者の視点を貴重な地域支援として集約・組織化
- 国の「緊急雇用事業」により 100 人規模の町民を社会福祉協議会の生活支援員として登用

いて心的ケアと共に必要な

“みながり”がアウトリーチを支えた

協力

行政
(国・町等)、
各地の社協、
民間企業、
大学、など

PART-3：復興に寄せて -- 私の経験とメッセージ

前段のPART-2でご紹介した南三陸町の地域福祉モデル（仕組み）を実効性あるものとして構築し、実際に長年にわたり機能させてきた根源的な力とはいったい何だったのか。これはとても重要な問いです。周到的な計画や人材の充足などに加えて、物事を動かして継続させていく力がどうしても必要だと私たちは考えます。

ここで1つのエピソードをご紹介します。南三陸町社会福祉協議会の生活支援員の1人が聴き取り調査に答えた際のものであります。

「支援員の仕事で出会った、お酒が大好きなおじいちゃんとの思い出は今でも忘れられない。お酒を飲んだら外で寝る癖があった。誰も寄り付く人はなく、支援員だけが「ここで寝ていたら危ないからね」と粘り強く話しかけた。雨の日に外で寝ていたときは傘に入れてあげたこともあった。あるとき体調を崩して病院に行くようになり、「もうだめだろう」と保健師に言われたが、「一回仮設住宅に帰りたい」というおじいちゃんの要望で一旦戻ることができ、仮設住宅で再会した。おじいちゃんは泣いていた。「おめえらのおかげでここまで生きてこられた。ありがとう」と言ってもらい嬉しかった。その次の日におじいちゃんは亡くなった。」（出所：東北大学社会学研究室 生活支援員聞き書きプロジェクト『支え手になったあの日から：地域をみまもる支援員の語り』（2018年）より一部要約して引用。）

一読すれば1人の支援員による献身的頑張りのエピソードですが、南三陸町の地域福祉の特長は、こうした取組が多く、支援員ひとり一人によって粘り強く継続されてきたことにあります。特定の者による突出した感動物語ではなく、通常のこと、日常のこととして皆で実践してきたということ、この点にこそ上述の「物事を動かして継続させていく力の源」があると感じています。そして、これを象徴的に示す言葉が“みながり”です。

“みながり”—— 私たち皆三陸町社会福祉協議会のCSW・LSA・SCらとその関係者が、東日本大震災以降の復興・地域再生の過程で、折に触れて確認し合った合言葉です。「みながり」という日本語は辞書に載っていません。震災後の15年に及ぶ活動を通じて自然と生まれました。

「〇〇がかり」という表現は、例えば「重い荷物を三人がかりで運ぶ」というように、物事の解決に皆が力を合

わせて取り組むという意味です。これと同じように「みながり」には、「南三陸町の復興・再生を皆の力を結集して進める」という意味が込められています。ただ、この言葉は単に「皆で取り組めば復興は進む」というふうに理解するのは適切ではありません。この後の私たちの手記・証言をご覧くださいとお解りいただけると思いますが、私たちはこの言葉にとても大きな意味やこだわりを込めているからです。

特にLSA・CSW・SCをはじめとする社協スタッフの方々（自身も被災した町民（主婦が多かった））であり、最初は「福祉」の「ふ」の字も解らない状態でした。それが支援員を務めることとなり、専門的なレクチャーから始まり、実際に被災者と面会して“支援”をする場面に立ったとき、「私には無理…」との思いが幾度も心をよぎりました。しかし、くじけそうになったとき、もう無理かなと思ったときに生活支援員が交わし合った言葉、それが「みながり」でした。単なる方法論や精神論を表現したものではありません。生活支援員による様々な試行錯誤や、被災者との信頼関係の構築に向けた途方もない努力、その過程での悩み・喜び・成長など、とても人間らしい要素がギチギチに詰まった言葉なのです。そして、そんな私たちと毎日カンファレンス（業

■ “みながり”の復興・地域創り

--- 南三陸町社会福祉協議会のアプローチ

◎ いつも繋がりが合える関係を活動継続の原動力としてきた。

・・・三層構造、定例会議、共有・報告、課題合議

平時における地域福祉

<平時の支え合い文化=結>

務報告と助言の場)を持ち、悩みを聴いたり、ときには叱咤激励してくれた南三陸社会福祉協議会の仲間や町役場など関係機関の方々によるサポートもとてもありがたいものでした。そうした中で少しずつ、被災者支援という仕事のやりがいや自分自身の成長が感じられるようになり、当初の涙は徐々に笑顔に変わっていきました。

この「みながり」をチャートで表現すると下図のようになります。

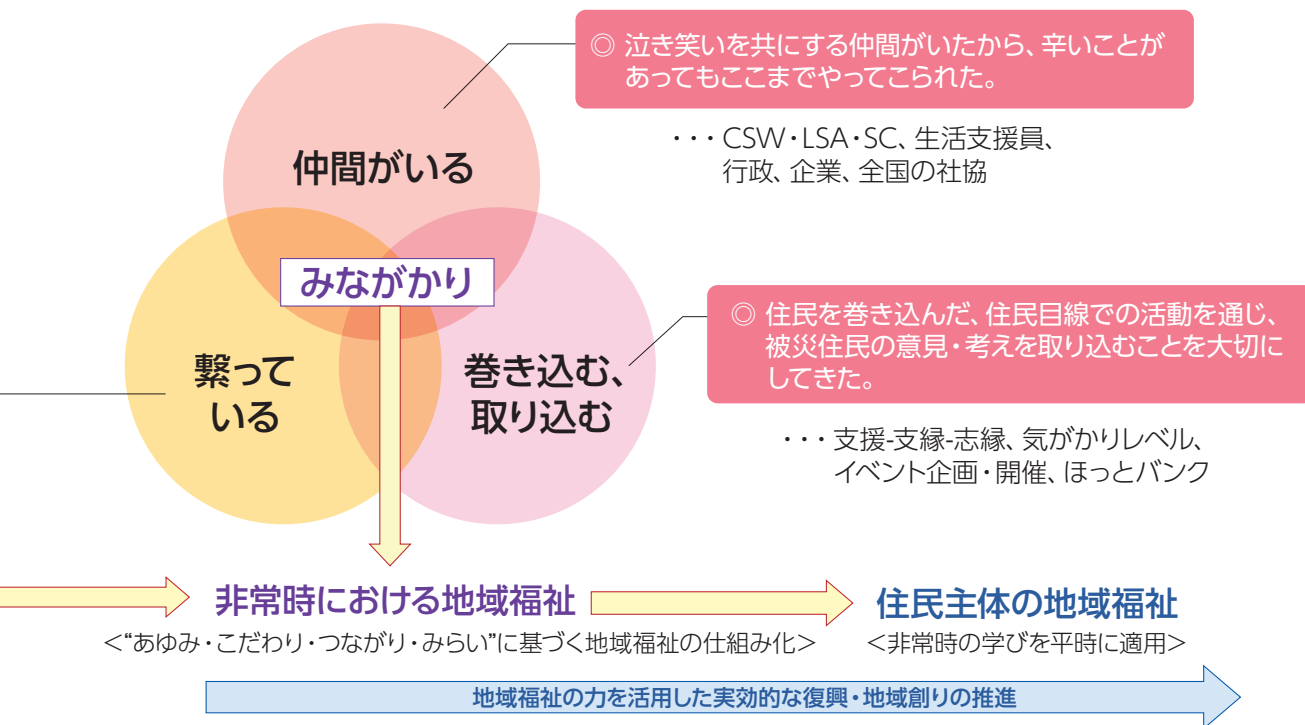
つまり「みながり」とは、「仲間がいる」こと、「繋がっている」こと、「巻き込む、取り込む」ことから成り立っています。町の内外に散り散りになった被災者を一人ひとり支援するという気が遠くなる業務を15年間続けられたのは、生活支援員が日々これらの要素の重要性を共有・確認し、“続けていける”と腑に落ちる気持ちを持ち続けることができたからです。

この後に続く私たちの手記・証言は、震災発生から15年を経たいま、「みながり」の大切さをしみじみと感じながら書いているという点で共通しています。ここで強調したいことは、「みながり」は被災者支援に取り組んだ当

初から全員で意図していたものではなく、ここまで15年間がんばってきて、今このとき、みなでこれまでの歩みを振り返った時の重要な“気づき”として万感の思いを込めた言葉だということです。そして、PART-2でご紹介した南三陸町社会福祉協議会の地域福祉モデルが構築され、実効的な“仕組み”として機能するところまで漕ぎつけたことの根っこの部分にはこの「みながり」があった、だからこそ続けてこられた、そう感じています。

以上の内容をぜひ念頭に置きながらこの後の手記・証言を読んでいただくと、私たちの想いをいっそうリアルに理解していただけたと思います。

手記・証言を書きながら、私たちは、生活支援員というのはある意味で“地域福祉の語り部”と見立てることができ、この資料の提供を通じて、町の復興過程における一人ひとりの体験や記憶、やりがい、成長、そして地域福祉にかけてきた想いを、地域や世代を超えて語り継ぐための伝承(語り継ぎ)を行っているというふうにも感じています。





地域づくりは 自分づくり

佐藤 美保 (さとう みほ)

地域福祉係
コミュニティソーシャルワーカー (CSW)

トピック年表	体験・記憶・思い出	自分の変化・気づき・成長
社協への入職時	災害ボランティアセンターに配属。同時期、部署内は退職者が相次ぎ、引継ぎもなく混乱の最中、全国から駆け付けたボランティア受入と被災者ニーズを把握しきれず、訳が分からない毎日だった。	NPO 団体や長期ボランティアが災害ボランティアセンターを支えており、些細なこともしっかり聴く事に努めた。次第に情報共有が効果的に促進され、コミュニケーションが円滑になっていった。
復興の道のり	災害ボランティアセンター閉鎖に伴い、被災者生活支援センター業務を経て、結の里に活動の拠点に移った。本部業務及び LSA として、災害公営住宅・防災集団移転で必要となるコミュニティ形成のサポートや、イベント等開催の情報発信・マッチングを行った。また、登録制住民ボランティア「ほっとバンク」の育成にも取り組んだ。	【ほっとバンク】誰もが、不安から復興に向けて進んで行くにはどうしたら良いのか…を考えさせられたと思う。町民は、全国から駆け付けた災害ボランティアの姿を見て「今度は、自分たちの町は自分たちで！」という意識が芽生えた。その気持ちが形になるように伴走した。この経験は有事と平時を繋ぐ典型的な事業だと思っている。
そしていま	丁寧に築いた住民との関係性を糧に、コミュニティソーシャルワーカーとして、地域の課題を把握し、その解決に向けた取組を住民と共にやっている。	人は一人では何も出来ない。みんなで知恵を出し合い、楽しみながら信頼関係を築くことが、安心安全な地域福祉に繋がると強く思う。

●南三陸社協と私 ～大震災を挟んで～

■東日本大震災が起きたそのとき私は…

家族で仙台に出掛け、帰宅途中の三陸道走行中に地震に遭った。車が大きく揺れ恐怖を感じた。

■私が南三陸社協に入ったきっかけ

友人から災害ボランティアセンターで仕事をしてみないかと誘いがあり、軽い気持ちで入職した。

■こんな取組に携わってきました

- ・災害ボランティアセンター（運営） ・被災者生活支援センター（ほっとバンク・いのちくん^{*1}・虹のバトン^{*2}・相談調整業務等）
- ・結の里事業（ほっとバンク・いのちくん・虹のバトン・相談調整業務等）

※1 いのちくん：救急医療情報キット ※2 虹のバトン：有償ボランティア

●地域福祉を通じた復興に対する私の体験的理解

これまでの道のり…つながり…

住民がどんなことに困り、何を求めているのか…。最初はお互いに相手の状況を探る感じがあったが、会話の中からそれぞれの個性や得意分野を知ることが出来た。個人の得意を引き出し、ワークショップの講師として、役割の創出や楽しみを企画する等、住民の生き甲斐に繋げることが出来た。これは自分にとっても大きな成果だと感じている。

■南三陸社協での活動から得た私の宝物

住民が不安になった時、社協を頼って来てくれることが、自分にとって最高の誉め言葉。知恵を出す事を求められている時こそ、最大の学びの機会だと思い、共に関係性を築いてきた。平坦ではなかったが、その道のりは私の宝物。

●“みらい”への私の想い・決意 —— 「創意と工夫、つながる地域づくり」に向けて ……

繋がり 社協での経験は自分の人生の中で価値あるものである。これまでを振り返った時、地域づくりは自分づくりでもあり、地域に育てて頂いたと感じている。この仕事を離れても、人と繋がり合って、一緒にいる人を元気づける温かさを与える人になりたい。



住民に寄り添い 笑顔の支援

三浦 美江 (みうら みえ)

地域福祉係
ライフサポートアドバイザー (LSA)

トピック年表	体験・記憶・思い出	自分の変化・気づき・成長
社協への入職時	軽い気持ちで入社。全く知らない地域で、仮設配置地図を見ながら、訪問活動。変わらないですかの声掛けに「変わりあるから、仮設に住んでいる」と住民から厳しい言葉。挨拶に戸惑い落ち込む日もあった。	訪問の難しさ、その人を知り、自分を知ってもらう、その人に合った関わり方、傾聴の大切さを学んだ。
復興の道のり	仮設訪問からみなし仮設訪問支援員となり町外から離れて暮らす方を訪問。町の再建情報や復興の様子をDVDなどで伝えた。懐かしさの余り涙する方もいた。南三陸町での合同再会サロンを開催。「南三陸に帰りたい」思いに寄り添い繋がりを続けた。	繋がり続けることの大切さ、住民に寄り添った、サロンやイベント開催に取り組む「チーム力」を学び、自分も楽しみながら成長できた。
そしていま	LSA となり高齢者相談室に常駐。高齢者クラブや活動団体を支え、それぞれの生きがいとなる季節の活動を提案し住宅を盛り上げ住民と共に元気になる活動を楽しんでいる。	住民同士がいつまでも健康で暮らして行けるよう地域コミュニティ、集いの場を一緒に楽しんで思い出を作っていくたい。

●南三陸社協と私 ～大震災を挟んで～

■東日本大震災が起きたそのとき私は…

失業中、仙台から親戚 3 名が来ていて自宅でお茶を入れていたところ大きな揺れ。家族全員で自宅裏の畑に避難、真っ黒い津波はすぐ目の前まで押し寄せてきた。

■私が南三陸社協に入ったきっかけ

時給千円の瓦礫撤去作業のアルバイトをしていた。その仲間から誘われ軽い気持ちで面接を受けた。

■こんな取組に携って来ました

仮設訪問支援員 住民同士の顔の見える関係性を作り集いの場、ラジオ体操や集会所でのお茶会を開催。

みなし仮設支援員 町から離れ避難生活をしている方に、町の再建情報や復興の様子などを伝えた。

生活援助員 LSA 災害公営住宅での新たな暮らしのサポート、見守り地域コミュニティづくりを行った。

●地域福祉を通じた復興に対する私の体験的理解

これまでの道のり

住民の声に耳を傾け、寄り添いから始まった福祉活動。共に生きがいとなる活動を支えコミュニティづくりに関わってきた。少しずつ信頼関係を築き住民同士の見守りにも繋がりが今では逆に自分が見守られ助けられていると感じ住民に感謝している。

■南三陸社協での活動から得た私の宝物

多くの仲間に出会い支えてもらい、今もこの仕事を続けていること。そして住民からの「ありがとう」の言葉が励みとなり宝物になっている。

●“みらい”への私の思い・決意 —— 「創意と工夫、つながる地域づくり」に向けて

これまで社協で経験した地域福祉を大切に、そして年をとっても学ぶ気持ちを忘れず生きがいを見つけ、地域づくりを若い世代に引き継ぎ一緒に楽しんでいきたい。



ともに支える 地域の輪

梶原 知子 (かじわら ともこ)

地域福祉係
ライフサポートアドバイザー (LSA)

トピック年表	体験・記憶・思い出	自分の変化・気づき・成長
社協への入職時	平成の森仮設に隣接した屋外テント「カフェあづまーれ」の担当になり、住民や支援者など来客の対応をすることになった。人と話すことの難しさを痛感した。	来店した人が少しでも気晴らしできるように、入りやすい雰囲気作りと傾聴することを心掛けた。多くの支援者から支えられたことに感謝している。
復興の道のり	LSA となり、知らない人や地域と関わることになり不安だったが、同僚や住民に助けもらった。自治会設立が難航し、コミュニティづくりの難しさを知った。	終の棲家に入り安堵した反面、初めての住宅暮らしに不安を感じている住民も多かった。住民に寄り添いその人に合わせたサポートが必要だと感じた。
そしていま	公営住民と地域住民との交流の機会が少しずつ増えている。地域のほっとバンクメンバーが増え、交流活動にも協力してもらい心強く感じている。	公営住民も地域住民も、同じ地域の仲間として安心して暮らしていただくためには、近所付き合い(繋がり)が大切だと感じている。

●南三陸社協と私 ～大震災を挟んで～

■東日本大震災が起きたそのとき私は…

家で家事をしていた時地震が起き、家族と飼い犬を連れて自宅裏の高台に上ったが、自宅前方に津波で家が流されてきたのが見え、恐怖を感じて裏山の高い所まで上って行った。

■私が南三陸社協に入ったきっかけ

仮設住宅に入居して一段落した頃、友人からの勧めもあり、近くで働けるということで応募した。

■こんな取組に携わってきました

生活支援員(歌津サテライト) カフェあづまーれで来客対応、仮設住宅見守り訪問、ラジオ体操、お茶会等
生活援助員 LSA (東東公営住宅～伊里前公営住宅) 自治会サポート、見守り訪問、ラジオ体操、交流活動等

●地域福祉を通じた復興に対する私の体験的理解

これまでの道のり…こだわり…

入職してすぐカフェあづまーれの担当となり、私が思っていた仮設住宅の見守り訪問ではなかったのが戸惑った。仮設住宅の高齢者を中心に、多世代、多職種の人達が来店され、お茶を飲みながらおしゃべりする場だった。狭い仮設住宅で、家族や近所に遠慮しながら生活していた住民にとっては息抜きできる居場所だったのだと思う。毎日長生き坂を上り通うことで運動になり、毎日会うことで見守りにもなっていた。ここでみなさんから聞いた話は、私にとって人生の勉強になったと思うことが多い。寒くても暑くても、どんな場所でも、人と話し笑うことが元気の源になるということを教えてもらったような気がした。

■南三陸社協での活動から得た私の宝物

住民からの「ありがとう」「ご苦労様」の声と、以前関わった住民から「あの時はお世話様」と声をかけられることが励みになっている。そして、多くのことを教えてもらい、話を聞いてくれた仲間の支えに感謝している。

●“みらい”への私の思い・決意 —— 「創意と工夫、つながる地域づくり」に向けて

被災後の生活は苦労続きだったが、地域の人達が支え合い、前を向いて復興に取り組んで来た。いざという時に支え合うのは地域の人達ということをお忘れず、平時からの繋がりを大切にしていきたい。



みんなで繋がる 地域ふくし

佐藤 直美 (さとう なおみ)

地域福祉係
ライフサポートアドバイザー (LSA)

トピック年表	体験・記憶・思い出	自分の変化・気づき・成長
社協への入職時	3日間の過酷な研修は、とても辛かったというより、福祉の事など全く分からない自分に務まる仕事だろうか?という不安が一番だった。	沢山受けた研修も、この仕事に就いたからこそ学ぶことが出来、福祉についての知識等を身に付けることが出来たと感じる。(今現在も日々勉強中)
復興の道のり	手書きの地図を作成し、住民を覚える、住民に覚えてもらうという事から、手探り状態で訪問活動が始まった。嬉しい言葉もあれば厳しい言葉もあったが、住民一人一人の言葉や行動が支えになっていった。	相手の気持ちに寄り添い傾聴してきたことで信頼関係が築けた。みんなで気に掛け合い、誰かと繋がるのが大切だという事を改めて感じ、自分自身、人との関わり方、地域への関心度が変わった。
そしていま	程よい距離間で住民と接している。「とりあえず、相談室に行ってみよう」と相談に来る住民が多い。「駐車場に車があると安心」と有難い言葉をかけられている。	解決できなくとも、「ここ(相談室)に来れば」と、住民の拠り所となって、安心感を持ってもらっている存在でいれることに感謝しつつ、顔の見える関係性を大切にしていきたい。

●南三陸社協と私 ～大震災を挟んで～

■東日本大震災が起きたそのとき私は…

南三陸ホテル観洋に勤務。揺れが収まって外に出た瞬間、引き波で家が沖に流れていく光景を見て何が起きているのか…夢の様だったのを今でも鮮明に覚えている。ホテルは建物の一部が被害にあったが、宿泊者や避難者へ出来る限りの対応に当たり、3日目に自宅へ帰宅することが出来た。

■私が南三陸社協に入ったきっかけ

ホテル観洋も震災直後はどうなるか分からなかったため退職。とにかく生活の為に何か仕事をしなければという思いだけで、応募し仕事に就いた。(急募の内容も福祉についてなど一切記載されていなかったのも、自分にも出来る仕事だと思った)

■こんな取組に携わってきました

巡回型生活支援員(歌津サテライト勤務)→生活援助員(LSA) ライフサポートアドバイザー(東西公営住宅 LSA→東東公営住宅 LSA 勤務) 住民が集まるきっかけづくり(ラジオ体操や住民主体のお茶会等) 相談事の傾聴(寄り添い)、行政や関係機関(専門職)への繋ぎ役

●地域福祉を通じた復興に対する私の体験的理解

これまでの道のり

自分自身、自宅を失い仮設住宅での生活が始まったと同時に、支援員という立場での訪問活動が始まった。初めは支援員という存在を簡単には受け入れてはもらえなかったが、何度も足を運び、寄り添ってきたことで、ほんの少ししかドアを開けてくれなかった方に「中に入ってお茶飲んでいけ」とまで言われるようになった時、改めて自分がしてきた事に間違いはなかった、信頼関係が築けたと感じた。

■南三陸社協での活動から得た私の宝物

- ・私達人間は、誰もが一人では生きていけない。人と関わることが大切だという事を、日々住民と接する事で自分自身の人との関わり方が変わり、地域への関心度が変わった。住民一人一人の言葉や行動が支えとなり、自分自身が成長させられていると感じる。
- ・どんな時でも相談しあえる仲間、居場所があるという事が私の支えであり宝物。

●“みらい”への私の想い・決意 —— 「創意と工夫、つながる地域づくり」に向けて

顔の見える関係性 何気ない日々の暮らしの中で、ちょっとした手助けが見守りにも繋がる。お互い気に掛け合い、何かあったら「助けてほしい」と声に出せる(SOSを出す事が出来る)地域になってほしい。人と関わるのが苦手な方もいる、人それぞれ違うのでその人その人のスタイルで良いと思う。一人でもいいから誰かと繋がっている環境(関係性づくり)が必要。程よい距離間で顔の見える関係性を大切に関わってきたい。



笑う門には ふくし あり

遠藤 ゆかり (えんどう ゆかり)

地域福祉係 生活支援コーディネーター (SC)
兼コミュニティソーシャルワーカー (CSW)

トピック年表	体験・記憶・思い出	自分の変化・気づき・成長
社協への入職時	3日間の初任者研修を受け、気軽に入職してしまったことを少し後悔した。朝昼夕のミーティングで情報共有、対応等図る。	被災者支援（生活支援員）の役割とは？いつも模索していた。役割を理解してもらえ自分たちが黒子となり住民主体の取り組みができた時は達成感を感じることができた。
復興の道のり	主婦目線の視点で継続した訪問活動をした。被災者の生活の小さな変化を見逃さずそこから見えた課題を行政関係機関に丁寧に繋いだ。	心の復興は人と人との繋がりがや生きがいを見つけることが大事であることがわかった。課題が出た時に内容に応じた研修が行われた。座学の研修は苦手だったが「学び」は現在の糧となっている。
そしていま	高齢相談室が閉室になる際に住民から感謝の言葉をいただき貢献できたことをうれしく思う。地域づくり、協議体とは？学びながら地域と関わる。	地域の活動団体を元気に継続できるように、健康寿命を延ばす活動を自分も楽しみながら行っていきたい。

●南三陸社協と私 ～大震災を挟んで～

■東日本大震災が起きたそのとき私は…

理容室を営んでいた私はお客様の施術をしていた。これまで経験したことのない強い地震揺れだったのですぐに津波が来ると思い、とにかく高い所に避難した。

■私が南三陸社協に入ったきっかけ

理容室再建まで町の臨時職員として働いてみては？と訪問に来ていた保健師からアドバイスを受け被災者支援の仕事をやってみようと思った。

■こんな取組に携わってきました

巡回型支援員（南方サテライト勤務）・常駐型生活援助員 LSA（災害公営住宅西地区担当・生活支援コーディネーター兼コミュニティソーシャルワーカー）

●地域福祉を通じた復興に対する私の体験的理解

これまでの道のり…こだわり…

- ・住民が生きがいを持てるように趣味の会を作り、くらぶ活動と称した集まりの場づくりに取り組んできた。仮設住宅集会所活動では、その集大成として、「おらほの作品展・おらほの音楽会」を開催し、さらには南三陸町地域住民が参加する「みんなの作品展」へと発展する開催につながった。このことは、仮設住宅での生活であっても、住民が楽しい時間を持てることで、前向きに生きる力が生まれたと実感している。
- ・寄り添うことの基本は、共感と傾聴から始まり、すべての支援につながったと感じる。

■南三陸社協での活動から得た私の宝物

震災後、社協という場所で自分自身が成長し、住民との関わりを通し、生かされていることを実感する場面が多かった。特に、自分の声や振る舞いが住民に届き、笑顔を返して頂いたことや、「ありがとう」の感謝の言葉を届けて頂いたことは、当時の自分への大きなエールになり、今もかけがえのない大切な宝物となっている。

●“みらい”への私の想い・決意 —— 「創意と工夫、つながる地域づくり」に向けて ……

「ふ」だんの「く」らしの「し」あわせの実現（福祉の充実）を目標に、明るく元気に活動し笑顔・笑いの絶えない地域づくりをしていきたい。



つながりで ネットワークづくり！

千葉 ユミ (ちば ゆみ)

地域福祉係 生活支援コーディネーター (SC)

トピック年表	体験・記憶・思い出	自分の変化・気づき・成長
社協への入職時	社協を知らず就職したので、3日間の研修はとても厳しいものだった。正直務まるか不安しかなく、ダメならいつでも辞めれば良いと思っていた。	毎日の訪問はとても大変だったが、月日を重ねるうちに支援員と認識され、住民との関係性を築く事ができたことで仮設住宅が無くなるまで仕事を続けようと思うようになった。
復興の道のり	住民との関係性を築く事に時間はかかったが、お茶会やイベントを通し住民の居場所作りをして、住民力が発揮されるようになった。	訪問を重ねる事で、何もしゃあげる事が出来ないと悩むこともあったが「聞くことが効く」相手の話を真剣に聞くことが、相手の悩みが軽減する、傾聴の大切さを学んだ。
そしていま	7年前生活支援コーディネーターになり生活支援体制整備事業やコーディネーターの役割を自分で説明できるようになるまで悩んだ時期もあったが、地域住民の声を基に活動につなげるサポートをしてきた。	社協職員として、住民に寄り添い、共に歩んできた。今南三陸町の「住民力」はとても素晴らしいものと感じる。社協職員である私が住民の力に支えられ事業が成り立っている事をとても感謝している。

●南三陸社協と私 ～大震災を挟んで～

■東日本大震災が起きたそのとき私は…

町内にあるスーパーの店員をしていた。地震後は南三陸高校に避難し、メールが友達と繋がり息子2人が学校に避難して無事な事、夫ともメールが繋がり無事である事は確認出来た事が救いだった。

■私が南三陸社協に入ったきっかけ

社協の職員募集のチラシをみた。仕事内容が配食・ウォーターサービスで自分にも出来ると思った。

■こんな取組に携わってきました

巡回型支援員、歌津サテライトで勤務。見守り訪問活動とラジオ体操と社協オリジナル体操で集まるきっかけを作り、住民主体でお茶会が開催される事につながった。

災害公営住宅 LSA に勤務。訪問、見守り活動と地域コミュニティ作り。自治会のサポート支援を行った。

生活支援コーディネーター。ニーズの把握、担い手の発掘、育成、活動の立ち上げや運営支援。住民の声を形にする活動をしてきた。

●地域福祉を通じた復興に対する私の体験的理解

これまでの道のり…つながり…

集いの場の提供とし、ラジオ体操と社協オリジナル体操を行った。ラジオ体操後は住民主体でお茶会を行うようになり、社協オリジナル体操は、職員による出前講座で、介護予防の一環として地域で取り入れられている。また、活動団体の運営支援として、地域住民の小さなつづがきを(声)を形に(実践)につなげる支援を行い、住民主体の活動につながった。住民主体は、住民に丸投げする事ではなく、住民の意見を尊重し共に歩み、サポートしていく事で、地域住民が活動に悩んだ際「そうだ社協に相談しよう」と思える関係性を築いていく。

■南三陸社協での活動から得た私の宝物

入社してすぐは「自分に向いていない時はすぐに辞めよう」と言う思いでいたが、沢山泣いても、悩んでも自分の生活がしんどいなと思った時でも15年続けられてきたのは、共に支え合える「仲間」がいた事と、事業を進めるうえで悩んだ時、相談出来る上司がいた事で一つ一つ前に進むことが出来た。私の宝物は共に歩んできた仲間や上司です。また、いつもお願い事に快く協力してくれる地域住民が宝物です。

●“みらい”への私の想い・決意 —— 「創意と工夫、つながる地域づくり」に向けて

全ての町民が安心していつまでも自分らしく暮らせるよう、多世代、多職種の連携、横のつながりがとても大切になる。地域は、みんなでつながりより良いものにしていきたい。



笑顔に支えられた 繋がりがづくり

高橋 信子 (たかはし のぶこ)

地域福祉係 生活支援コーディネーター (SC)
兼コミュニティソーシャルワーカー (CSW)

トピック年表	体験・記憶・思い出	自分の変化・気づき・成長
社協への入職時 H23.7.29	面接の際に仮設住宅の相談員をして欲しいと話されたが、仕事の内容もよく分からないまま3日間の研修後すぐに訪問活動が始まった。チャイムを鳴らす手が震えた。	とにかく働かなければと必死。自分の出来ることを精一杯やるしかないと思い無我夢中で毎日過ごした。ある意味挑戦でもあった。
復興の道のり	孤立孤独を防ぐため取りこぼしのないよう効率よく訪問活動が出来るようにと、マニュアルのない業務に皆で試行錯誤しながら取り組んだ。根気強く訪問傾聴を重ねることで徐々に信頼関係を築くことが出来、そこからニーズも見えてきた。	住民の思いにひたすら寄り添いその思いに応えられた時は、共に喜びいつも笑顔に支えられてこの仕事を続けてこれたと思っている。
そしていま	様々な活動を通して住民が元気を取り戻し、地域のため自分のためとボランティア活動へも積極的に参加される方が増え、住民主体の地域づくりにおいても大きな「力」となっている。	「お互い様」「助け合い」「支え合い」の大切さを痛感し、人と人の繋がりに自分自身も助けられてきた。地域で長く暮らせるよう近隣同士の繋がりと安心して暮らせる地域づくりを進めていかねばならないと感じている。

●南三陸社協と私 ～大震災を挟んで～

■東日本大震災が起きたそのとき私は…

自宅にてピアノ教室を主宰、生徒はまだ来ていなかった。義母と娘と3人で裏山へ駆け上がり、その後向かいにある避難場所へ移動した。

■私が南三陸社協に入ったきっかけ

教室の再開を諦め仕事を探した。緊急雇用200人の募集に、それなら自分も雇ってもらえるかもと飛びついた。

■こんな取組に携わってきました

被災者生活支援センターオリジナルの体操曲「長生き坂音頭」の曲作りに関わりCDを作製。各集会所での体操に使用され、公営住宅に移ってから長く愛用されている。仮設での良かった経験は、終の棲家に移行してからも継続され、特に体操とお茶会はコミュニティ再生や介護予防のための有効な財産となっている。

●地域福祉を通じた復興に対する私の体験的理解

これまでの道のり…こだわり…

仮設での生活がだいぶ落ち着いた頃、趣味や特技を生かした「大人の部活動」が始まった。発表の場を設けるなど充実した活動は大切な思い出となり“生きる張り合い”を黒子となり支えた私たちも共に達成感を味わうことが出来た。個々の強みを生かし住民同士の結びつきを更に強め、復興への意欲と地域の力へと繋がっていたものであったと感じている。

■南三陸社協での活動から得た私の宝物

様々な人のご縁を頂いて仲間と共に泣き笑い、生活者の一人として住民と苦楽を共にしてきたこの年月と多様な経験は、自身を成長させてくれた大きな宝物となっている。「あんた達が居てくれたから今の生活があるんだよ」との住民の言葉がとてもしんどく、何よりもいつも笑いが絶えず自身も楽しみながら活動してこれたことを誇りに思う。

●“みらい”への私の想い・決意 —— 「創意と工夫、つながる地域づくり」に向けて

住民の主体性や支え合いを大切に職員全体（みながかり）のチーム力でさらに活動を活性化し、地域住民の安心安全で幸せな暮らしが未来の子どもたちへも繋いでいけるよう、これまで培った知見を生かして自分ができることで今後も社会に貢献していけたらと思っている。



めぐるつながる ちいきふくし

阿部 ユリヤ (あべ ゆりや)

総務係 主事兼技師
コミュニティソーシャルワーカー (CSW)

トピック年表	体験・記憶・思い出	自分の変化・気づき・成長
社協への入職時 H26.4	結婚、出産をして仕事を探していた時、知人から災害 VC で働かないかと話があり入職。	1年働こう!! そんな軽い気持ち 社協が何をやってるところかも知らない 特に何も考えてない 24 歳
復興の道のり	震災から 2 年。 瓦礫撤去や、農地の再生、お茶会等の支援で住民との交流も増えていく。町並みも変わり始め、寂しい気持ちもありつつ新しい生活に向けて日々の生活を精一杯生きている。	VC でボランティアさんが町の為に沢山頑張ってくれていたことを知る。 自分は何もしてない事に気づく。 気づかないところで、社協が地域を支えている事を実感し、すごい事してるんだ!! これが“ふくし”なんだと体感。
そしていま	住民の皆さんと一緒にたくさんの活動をしてきたことで、「大丈夫か?」「手伝うか?」と逆に手を差し伸べてくれる関係性が築けた。つながりや、心地の良い関係性は短時間では気づけないもの、多くの時間が今につながっている。	苦手な人とは関わらなければいいと思っていた若い頃、今では人との関わりにはたくさんの学びがあり、新しい関係性を楽しく嬉しく思う日々です。色んな方の色んな考えや思いは自分を成長させてくれる。

●南三陸社協と私 ～大震災を挟んで～

■東日本大震災が起きたそのとき私は…

町内冠婚葬祭会館勤務。勤務先では、社協の高齢者芸能発表会が開催されており、生存者の中の一人として会館で一夜を過ごし、助けたいと思う人間の姿や、生きたいと思う人間のきかない部分を目の当たりにしました。※今思えば、社協との出会いはここだったかも…

■こんな取組に携わってきました

何でもない私が社協へ入職。災害 VC に勤務し、全国のボランティアさんの受け入れ、調整業務をしました。1 年で産休に入り、復帰後は総務課へ勤務、困窮者の支援や、介護予防体操 (百歳体操) の普及を担当し、色々な生活環境の地域の方々、福祉団体との関わりの中で、無知だった私は資格取得や必死に勉強をしました!! (笑)

●地域福祉を通じた復興に対する私の体験的理解

これまでの道のり…つながり…

ボランティアで来てくれていた方との交流が今でもあり、近くで災害が起きると必要なものはないか、何に困っているか気にかけてくれる関係性が気に入っています。それは私だけでなく、地域の皆さん一緒に、おたがい様の気持ち、感謝の気持ちから、今のつながりになっていると思っています。

■南三陸社協での活動から得た私の宝物

地域強制、あ! 地域共生です。時には強引さも必要です。地域活動は自然に生まれるものもあれば、少しのきっかけで生まれるものもあったり、そのきっかけづくりを社協の一員として関わり、関わった関係性が目には見えないところで、助け合いにつながっている事を実感する時です。それから、一緒に、必死に業務をこなしている職員です。

●“みらい”への私の思い・決意 —— 「創意と工夫、つながる地域づくり」に向けて

～なせばなる・なさねばならぬ・たのしみなみらいづくり～

社協での実践や経験を、地域の一人として地域にかえしていく、子供たちとこれからも一緒に住み続ける地域を楽しくつくっていききたい。



支え手になった あの日から 地域を見守る支援に

阿部 福美 (あべ ふくみ)

地域福祉係
ライフサポートアドバイザー (LSA)

トピック年表	体験・記憶・思い出	自分の変化・気づき・成長
社協への入職時	毎日ドキドキしながらどんな人がドアの向こうから出てくるのだろうと思いながら訪問。	ドキドキが誰かの力になりたいと思うようになった。
復興の道のり	顔と名前を覚えてもらい、同じ被災者のあなたたちと話していると安心と言われる。	住民の中からキーパーソンになってくれる方を探し自主的なお茶会などのお手伝いをしながら共に学んだ。
そしていま	アルコール依存症の方が病気になり、亡くなる前にあなた達のお蔭で今まで生きてこられた、ありがとうと言われ、今まで自分たちがしてきたことに間違いはなかったと感じた。	住民同士が笑顔で共に支え合いお互い様を意識できるように影の力となり働いています。

●南三陸社協と私 ～大震災を挟んで～

■東日本大震災が起きたそのとき私は…

水産加工場に勤め、養殖業のわかめの繁忙期で仕事を休みわかめ仕事をしていた。

■私が南三陸社協に入ったきっかけ

震災で仕事ができなくなり、途方に暮れていたら友達からやってみないと誘われ面接を受けた。離れて暮らす娘たちから背中を押された。

■こんな取組に携わってきました

仮設住宅訪問中、地域のお婆さんたちが震災前にお茶のみしていた他の仮設の方々は元気かとの住民の声を聞き地域同郷サロンを開催した。そして公営住宅に移ってからも毎日集会所で体操を行い介護予防や住民同士の見守り活動につながっている。

●地域福祉を通じた復興に対する私の体験的理解

これまでの道のり…こだわり…

福祉のこと等何も分からず、ただ住民に寄り添い住民の声を傾聴した。窮屈で不自由な生活や被災の現実と向き合い、継続して訪問することで、信頼関係が少しずつ出来てきて住民の笑顔を見ることができた。「あなたの言葉は魔法だね」と住民に言われ誰かのために役に立ちたいと思うようになった。

■南三陸社協での活動から得た私の宝物

辛い時も悲しい時もいつも隣には素晴らしい仲間がいたからこそ、今の自分がありそして居場所がある。笑顔を忘れず、住民との信頼関係とつながりが私の宝物だ。

●“みらい”への私の想い・決意 —— 「創意と工夫、つながる地域づくり」に向けて

これまでの経験を活かし地域生活の中で、地域コミュニティ、婦人会を盛り上げ住民の皆さんと一緒にこの町で暮らして良かったといえるように活動を盛り上げていきたい。また地域の方々と繋がり自分の出来ることを探し活動を通して「学ぶ」気持ちを忘れない様に取り組んでいきたい。



繋～住民と共に創り出す「ふ・く・し」

吉田 透 (よしだ とおる)

総務係 主事兼技師
主任コミュニティソーシャルワーカー (主任 CSW)

トピック年表	体験・記憶・思い出	自分の変化・気づき・成長
社協への入職時	初日からのハードな研修が3日間、「見守り活動支援をして下さい!」と話され、聞いていた業務内容の違いに困惑。	とりあえず、何とかやってみるかの勢いで日々活動。多世代との業務で少しずつ人見知り解消してきた。
復興の道のり	仮設住宅の支援からみなし仮設住宅への支援を担当。カーナビを頼りに毎日宮城県内避難者を訪問。日中一人で居る住民が多く、話し相手も居ない。	「傾聴」の大切さを知ったことでコミュニティ能力の向上に繋がった。質問に対し明確な答えを出すことは出来ないが話し相手になることで、寄り添いが生まれた。
そしていま	様々なイベントを通じて、担い手となる住民が増え、丸投げではない住民主体となり、共に伴走することで「社協」のPRにも繋がっている。	相談援助業務等の担当として、公的な制度だけではない、人の気持ちに寄り添うつなぎ役(顔の見える黒子)として日々の業務に奔走している。

●南三陸社協と私 ～大震災を挟んで～

■東日本大震災が起きたそのとき私は…

コンビニでアルバイト中の大震災。パニックになりながら、高台の避難場所に逃げた。

■私が南三陸社協に入ったきっかけ

約200人の募集で、震災があったことで自分にも復興の為に何かできないかと思い応募。

■こんな取組に携わってきました

巡回型支援 (南方サテライト勤務見守り訪問)

訪問型支援 (県内みなし仮設班、県内みなし仮設訪問や再会さろん企画)

被災者生活支援センター本部 (契約関係・各サテライト事業調整等)

社協総務課事務局 (法人運営事業・契約・経理・給与・各種団体・相談援助業務等)

●地域福祉を通じた復興に対する私の体験的理解

これまでの道のり…こだわり… 「当事者性を持った関わり」

みなし仮設住宅支援員として従事し、避難生活を余儀なくされた方を訪問する。日中一人で孤独な生活をされていたが、我々支援員が訪問すると笑顔と涙が溢れ、その想いを語り合える交流の場が必要と思い、「再会さろん」というイベントを計画。仙台市と登米市に避難している方が多かった為、こういった交流機会を得ることで新たな交流が生まれ、生活に張り合いを持てた方が多くいた。しかしながら、どんなに利便性の良い街に住んでも「やっぱり南三陸がいい!」と故郷を思う郷土愛の気持ちを忘れないということ。繋がりが続けることが大事!!

■南三陸社協での活動から得た私の宝物

「再会さろん」を通じて、交流の場を作ることや人と触れ合う大切さを知り、私たち支援員がそばにいるということを知って頂いた。「またございん!」「あんだだぢしか話すいいねえから!」こんな言葉があったからこそ、訪問し続けられ、支援→支縁→志縁というコミュニティの関係性が生まれ、「人との繋がりは一生の宝物になる!」また、一緒に業務してきた社協職員の暖かさに感謝!「皆がかりのチームワーク力」

●“みらい”への私の想い・決意 — 「創意と工夫、つながる地域づくり」に向けて ……

繋がり これから先のこの南三陸町の姿を想像したときに、「平時からの繋がり」を大事にすることで、災害が起こった際でも双方に支え合う関係が生まれてくる。社協のチームワーク力を活かしながら、いち早く気付けるように地域との関わりを大事にすることが「ふ・く・し」に繋がってくる。



笑顔をつぐ ～つながりの循環～

佐藤 美由紀 (さとう みゆき)

総務係 技師
コミュニティソーシャルワーカー (CSW)

トピック年表	体験・記憶・思い出	自分の変化・気づき・成長
社協への入職時 H23.8.24	3日間の研修で募集にあった業務内容との違いに、自分に出来るのかと入職したことを後悔。分からない事ばかりで悩むことも多く毎日、不安いっぱい業務をこなしていた。	人見知りの性格ゆえ、1期で入職していた先輩支援員についていくので必死だった。傾聴・自分達の役割とは何かを自問自答していた。
復興の道のり	被災がなかった山間部の仮設住宅の支援員として業務に従事。傾聴しながら繋ぎ役として業務を行い、仮設住宅住民同士の交流や地域住民と仮設住宅住民との交流の場づくりも行った。地域住民の「被災された方の為に何かしたい」との想いにも寄り添うことが出来た。	「日々勉強」。訪問を重ねることに傾聴の大切さを実感。仮設住宅訪問時、住民から「笑顔がいいね」と言われ、些細な言葉がうれしかった。これまでの活動の積み重ねが住民との信頼関係に繋がっていることを実感し、自分自身の地域の関心度にも変化をもたらした。
そしていま	イベント等様々な活動を通し、住民の笑顔がたくさん見ることが出来た。また、自分も地域の役に立ちたいと活動している担い手となる住民も増え、住民と共に「住民主体の地域づくり」を体現出来ていると実感している。	人と人との繋がりの重要性を実感し、これまでの社協での経験が自分の財産となっている。社協の一員として地域福祉活動に従事し、住民に寄り添い共に活動出来ていること、多くのボランティアや企業、地域住民の支援や協力があってこそ活動出来ていることに改めて感謝しながら、日々活動している。

●南三陸社協と私 ～大震災を挟んで～

■東日本大震災が起きたそのとき私は…

病院近くの花屋に勤務中、今までにない大きな揺れで不安になりながら、祖母が入院中の病院に避難。病院職員に助けられた祖母や病院関係者、避難してきた住民などとともに一夜を過ごす。次の日、知人と一緒に山間部の知人宅でお世話になった。

■私が南三陸社協に入ったきっかけ

震災で職を失った。多くの町内外のボランティアの姿を目にし、「自分も何か町の役に立ちたい」という思いから、ハローワークで緊急雇用職員募集の求人を見つけ応募。

■こんな取組に携わってきました

巡回型支援員・入谷サテライトで勤務。被災者生活支援センター本部を経て、社協事務局勤務となり経理などの事務を担当。その後、地域福祉係（結の里）で地域福祉の業務に従事、共同募金委員会やイベント実行委員会などの担当となり、地域住民と共にイベントなどを通し、コミュニティづくり・居場所づくりを行ってきた。現在は事務局で介護請求等の事務処理を行っている。

●地域福祉を通じた復興に対する私の体験的理解

これまでの道のり…つながり…

ささえあいの拠点「結の里」でのイベントなどの活動を通じ、住民の声に寄り添い、その声を形にし、たくさんの笑顔を見ることが出来た。子どもから高齢者、障がいを持った方など多くの住民が集い合える居場所となり、多世代交流に繋がっている。また、住民や町外県外から来る方々から「結の里に来ると元気が出る」「また来たくなる」などうれしい言葉を多く頂き、自分達が楽しんで活動していることが伝わり更なる「つながり」を生んでいる。小さな積み重ねが循環して「あったかい地域」になっていると実感している。

■南三陸社協での活動から得た私の宝物

住民の笑顔。そして、震災時お世話になった方と社協の活動を通じ再会でき、今でも繋がっている。多くの出会い・ご縁が更なる支縁に繋がることを体感してきた。こういった経験、学びが自分の糧となり宝物になっている。どんな時も一緒に乗り越え活動してきた仲間達。仲間の支えがあったからこそ今までやってることが出来た。南三陸町社協のチームワークは絶大!! 感謝感謝です。

●“みらい”への私の想い・決意 —— 「創意と工夫、つながる地域づくり」に向けて

楽しみを一緒に!! 社協での実践や経験で地域福祉はつながり合う・育て合うという事を学んだ。さらに子どもがいるだけで誰もが笑顔になり、子どもの「力」は大きい。自分自身も地域の一員として、お互いさまの関係で支え合い・つながり合える地域づくりをみんなで一緒に楽しみながら取り組み、未来ある若い世代・子ども達に繋げていきたい。



みんなと築いた 繋がり笑顔

千葉 幸恵 (ちば ゆきえ)

総務係 技師
コミュニティソーシャルワーカー (CSW)

トピック年表	体験・記憶・思い出	自分の変化・気づき・成長
社協への入職時	最初は地名や住民の名前を覚えるのが大変だったし、訪問しても家が残った事を言にくかった。この仕事は2、3年で終わると研修の時から言われて続けていた。	住民にどう声掛けをすればいいのか不安な気持ちで始まった見守り活動。色々な事を言われ辛い時もあったが、どんな時も仲間と支え合いながら住民と向き合い寄り添ってきた。
復興の道のり	住民に寄り添い傾聴し続けたことで、信頼性が出来てきた。また、住民のやりたいことや楽しみを形にし、住民の楽しみ、役割、やりがい、繋がりを提供することが出来た。	部署が変わることが多かった分、地域性の関わり方や多くの方と関わらせてもらい、自分を成長させてもらった。
そしていま	今年度から総務課事務局に異動になり、また新たな事業で今までと違う住民と関わるようになった。これまでも異動が多く、その都度覚える事が多く大変だったが、これまで多くの住民と関わってきたことが今に繋がっているように感じる。	社会参加することで健康寿命を延ばし、地域で暮らし続けられるように、これからも住民に寄り添いながら活動していきたい。

●南三陸社協と私 ～大震災を挟んで～

■東日本大震災が起きたそのとき私は…

社内内職を行っていて、地震の直後社長からすぐに帰るように言われ、保育所と小学校に子供たちを迎えに行ったが、小学校は警報が出ていた為すぐに返してもらえなかった。

■私が南三陸社協に入ったきっかけ

震災で仕事も無くなりがれき撤去の仕事と一緒に近所の方から誘われ、次の仕事を考えた方がいいと思い軽い気持ちで応募した。

■こんな取組に携わってきました

巡回型生活支援員 (志津川、歌津、戸倉サテライト勤務)：仮設住宅の見守り訪問、お茶会、ラジオ体操
被災者生活支援センター本部：各サテライト事業調整等
常駐型生活援助員 (LSA) (中央公営住宅、東西公営住宅勤務)：見守り訪問、傾聴、関係機関へ繋ぎ役
社協総務課事務局：各種団体、いきいき百歳体操事業等

●地域福祉を通じた復興に対する私の体験的理解

これまでの道のり

社協のことを何も分からず入職し、初めは住民にどう寄り添えばいいのか皆で考え、沢山の講習を受けたりアドバイスを頂きながら関わってきた。徐々に支援員を受け入れてもらえるようになり、相談やちょっとした困りごとをお願いされるようになった。LSA になってから特に、住民を支援しているようで本当は逆に住民から見守られていたように感じた。

■南三陸社協での活動から得た私の宝物

支援員の仕事を始め、人と関わりあうことの大切さを学んだ。そして、多くの方との出会いが自分の物事の見方を広げたように感じる。また、苦楽を共にしいつも支えてくれた仲間がいたからこそ、これまで頑張れたし、今の自分があると思う。

●“みらい”への私の想い・決意 —— 「創意と工夫、つながる地域づくり」に向けて

地域住民がいつまでも安心して地域で暮らし続けられるように、平時から多世代が交流し顔の見える地域づくりを関係機関も含め一緒にいき、災害時に住民同士が協力し合えるような関係性づくりをサポートしていきたい。



小さな成功体験の 積み重ね

～つながりが生み出す効果～

芳賀 裕子 (はが ゆうこ)

地域福祉係 主事兼技師
ライフサポートアドバイザー (LSA)

トピック年表	体験・記憶・思い出	自分の変化・気づき・成長
社協への入職時	社協を知らずに入職。入職直後、主任生活支援員に任命され不安しかなかった。マニュアルがない業務の上、今まで人を束ねるような仕事をしたことがない 20 代の私には、年上を相手に主任業務をするのは重圧だった。	自分がやらなきゃいけないという使命感から、気持ちだけが焦っていた。被災者支援は、一人では出来ない、全員で取組み、チーム、組織として前に進んで行くことを仲間が気付かせてくれた。
復興の道のり	生活支援員の存在意義を理解してもらう事からスタート。毎日根気よく仮設を訪問し、住民の不安や寂しさを傾聴しながら、一人ひとりに寄り添うことを心掛けた。「南三陸町から孤独死を出さない」という一つの目標を掲げ、仲間と同じ方向を向いて歩いた。	地道な活動の積み重ねの先に、住民と信頼関係が出来、つながりが生まれたと実感した。私たちが待っていてくれる住民と、辛い時に何でも言い合える仲間がいたから、この仕事を続けて来られたと思う。
そしていま	住民の想いを汲み取ること「寄り添い・傾聴」は今も継続している。住民を巻き込み、主体性を持って活動出来るよう、自分も楽しみながら取組むことを意識している。	被災者支援の教訓として、顔の見える関係があつてこそ、人のつながりは安心・安全を生むことを学んだ。平時の関わりや見守りなど、普段の近所づきあいが大切であり、災害時に生きることを地域へ伝えている。

●南三陸社協と私 ～大震災を挟んで～

■東日本大震災が起きたそのとき私は…

仙台市で美容師として働いていた。その日は自宅におり、自宅マンションにて被災。

■私が南三陸社協に入ったきっかけ

震災当時、住民の避難誘導の際に殉職した消防士の父が守ろうとした町と、被災した住民のために、少しでも地元の力になれるかもしれないと思い入職。

■こんな取組に携わってきました

サテライトセンター※主任生活支援員（仮設住宅への訪問活動・見守り支援・住民参加の体操・お茶会等）

被災者生活支援センター※本部（事業企画、運営・支援員のメンタルケア・調整業務等）

生活支援コーディネーター（介護予防啓発・地域資源発掘、調査・ニーズと取組のマッチング等）

結の里（地域福祉事業・ライフサポートアドバイザー事業・事業企画・運営・調整業務等）

●地域福祉を通じた復興に対する私の体験的理解

これまでの道のり…こだわり…

被災者が被災者を支援する難しさ、苦悩の連続。支援員の取組を理解してもらう事の難しさ、本当の意味で被災者の気持ちを理解できない辛さ、それでも「必ず分かってもらう日が来る」を信じ、失敗を繰り返しながら、一步一步前に進んだ先には少しずつ道が出来ていた。

■南三陸社協での活動から得た私の宝物

困難な状況下での支援活動を通じて、仲間と共に地域住民と関係性を築き、復興に向けた一体感を共有出来た事。自身のスキルアップや人間的な成長につながり、今に活着ていることが私の宝物である。

●“みらい”への私の想い・決意 ―「創意と工夫、つながる地域づくり」に向けて

住民同士のコミュニティ、人と人とのつながり。住民⇄住民、住民⇄社協、社協⇄他機関など、新たなコミュニティを形成し、人と人とが繋がり、また新たなコミュニティが生まれ、社協が関与しなくても、繋がりが連鎖していくと感じている。こうしたつながりが循環し、地域づくりの輪が広がるよう、高齢者・子ども・障害など、すべての人が地域の中で役割を持ち、支え合い、自分らしく活躍できる地域を目指したい。

取組の成果



巡回型支援

■取組の成果：定性的成果——関係者の声から

ここでは、私たち南三陸町社会福祉協議会のこの15年間の取組の成果をリアルにお伝えします。

PART-3で南三陸町社会福祉協議会のCSW（コミュニティソーシャルワーカー）やLSA（ライフサポートアドバイザー）らの手記・証言をお伝えしました。復興過程では、これらの社会福祉協議会スタッフだけでなく、被災者（町民）、関係する団体・個人など多様な方々からの色々な“声”が発せられました。多くの関係者の声の1つ1つが復興の1側面であり、南三陸町の再生にまつわるリアリティーであり、そしてそれぞれの方々の再生のストーリーです。

私たちはそうした“関係者の声”の1つ1つに福祉の現場で接して、そしてそれを自分たち自身の成長の糧や、活動上の手がかり・張り合いとしてきました。ですから、この“声”あったからこそ、前述した南三陸町社会福祉協議会ならではの地域福祉モデル（仕組み）が出来たのだと言っても過言ではありません。

そこでここでは、私たち南三陸町社会福祉協議会のスタッフが内部ワークショップを通じて選んだ、“関係者の印象的な声”をご紹介します。そしてその上で、その“声”から私たちが導き出した“大切な事実”を幾つかの観点からお伝えしたいと思います。

＜“関係者の印象的な声”＞

復興過程における福祉の現場で私たちが被災者をはじめとする関係者からいただいた数々の声の中で印象・記憶

に残っているものはたくさんありますが、下の表はそうした声の数々です。これら1つ1つは、なかなか数字やグラフで表現できるものではありません。しかし、こうした声に接しながら、徐々にお互いの胸襟を開き信頼を醸成し、やがて南三陸町の復興を共に担う仲間・同志としての関係性を作ってきたからこそ、町の再生が進んできたことは確かです。ですから、こうした声が得られてきたこと自体が、わが町・わが社会福祉協議会にとってかけがえのない“成果”だと思うのです。

＜“関係者の声”から導き出した“大切な事実”＞

被災者の心に必要なもの

- 生活再建するための情報、居場所、心の拠り所、生きがい、役割、「自分達の地域は自分達で作る」の意識が求められる。
- 心の拠り所を作ってあげること（被災者も自分自身も）が大切。それが生きる力や希望に繋がるから。

南三陸町社会福祉協議会ならではの取組・成果

- 被災者が支援することで、当事者目線のきめ細かい見守りが出来た。住民の声を聴いて、一緒に形にしてきた。
- 訪問を継続し、傾聴することで、被災者の想いに寄り添い、相手に合わせた役割と居場所づくりを提案することができた。

取組・成果の例：対被災者

- 自分事として地域づくりに積極的に関わるようになった（愛着を持って）。健康寿命を延ばすことに繋がる。

	初期	中期	後期
被災者の声	あんだ家あんの？ 何けんのや？ 何かしてけんのが？ 何の人なの？	何かあったら すぐサテライトさいぐら！	あんだの言葉は魔法の言葉、 何の薬よりも効く まだございん！
	あんだ家あるものいいべだ おめ入谷（被災していない内陸） だものいいべ	おたがいさまだもの 恩返ししないとね ボランティアさんには本当にお世話になった	自分たちでやってみっぺし！ 声がけてみんなであづまっぺ！
	支援員と言いながら 何も持って来ないのか？	俺に声をかけてくれるのは 支援員だけだ	最後に支援員に会いたい
	家がある人に 流された人の気持ちは分からない	あんだだぢしか 話す人いねえから！	支援員の車があると安心する 支援員がいて心強い
	久しぶりに人と話した！ あら～どございだの～（訪問型）	会いに来てくれてうれしい （訪問型） 方言でしゃべれるのが嬉しい （訪問型）	声がけてみんなであづまっぺ！

- LSAらによる傾聴の中から住民の声が形になった（楽しみづくり、居場所づくりの取組。落ちている気持ちを、生きる張り合いに繋げるための形。クラブ活動、作品展、音楽会、仮設時代にやった様々なこと。）

- 自分たちも楽しんで活動することで、住民の参加に繋がった。それがあって、住民の心を動かすことができた。

取組・成果の例：対スタッフ（CSW・LSA）

- 日ごろの関わりの中から声を吸い上げ、その気にさせることができるようになった。
- 得意な分野を活かして、生きがいづくりに対して、気取らず、気張らず、働く場所を与えられ、やりがいを感じ、生きがいを持たた。
- スキルアップ、色々な人と関わりながら、人として成長できた。仲間がいたことで続けられた。

南三陸町社会福祉協議会として未来に向け実践・伝承し続けたいこと

- 人と繋がり続けること、「みながかり」… 共に関わって取り組むということ。一人一人の能力を活かす。それがボランティア活動にも繋がっている。
- 笑顔を絶やさずに「笑う門にはふくしあり」をモットーに!
- 繋がったら離さない。社協を取り巻く地域も住民も外部も! ネットワーク（繋がり）が大事。結果は住民に繋がっていく。

取組の成果：定量的成果——データは語る

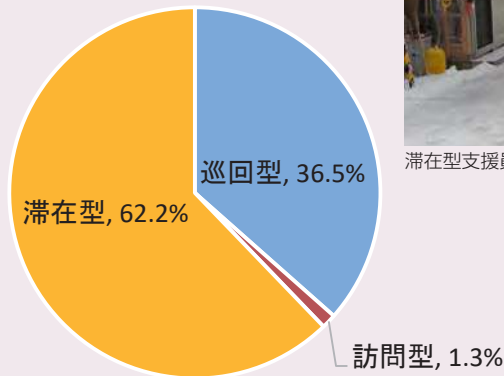
■「支援件数」のタイプ別シェア

（2011年7月から2013年12月までの累計ベース）

多くの町民が仮設住宅に転居した状況を踏まえて、被災者が被災者を見守るといふ、“被災者が時に支援者となる”という支援形態の必要性があった。そこで、高齢者が活躍する「滞在型」支援に重点が置かれた。

※ 基本形は巡回型。

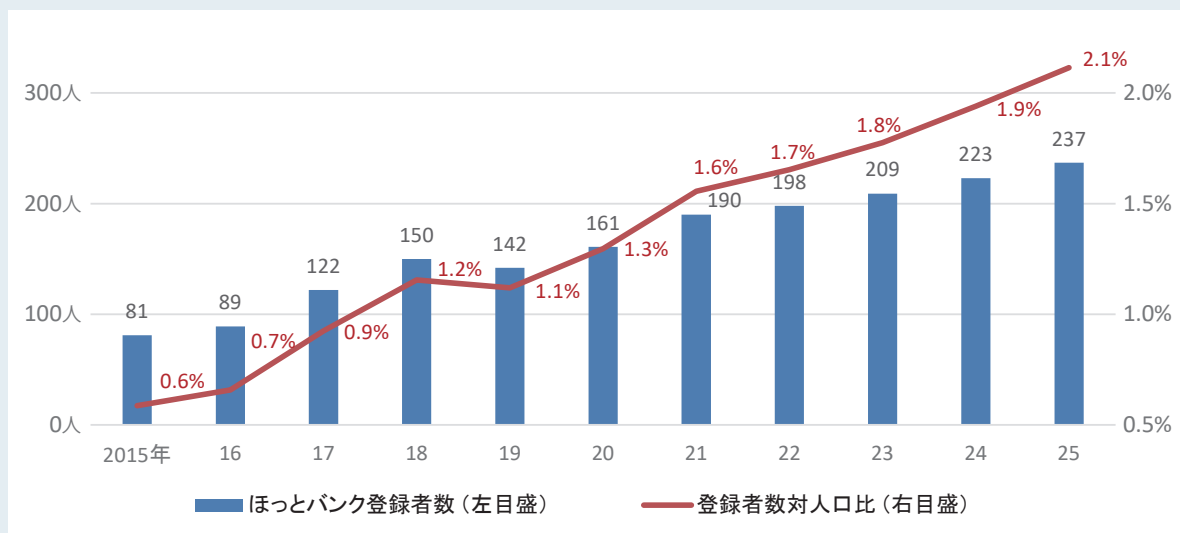
※ 訪問型は、いわゆる「みなし仮設」への支援。



滞在型支援員の活動風景

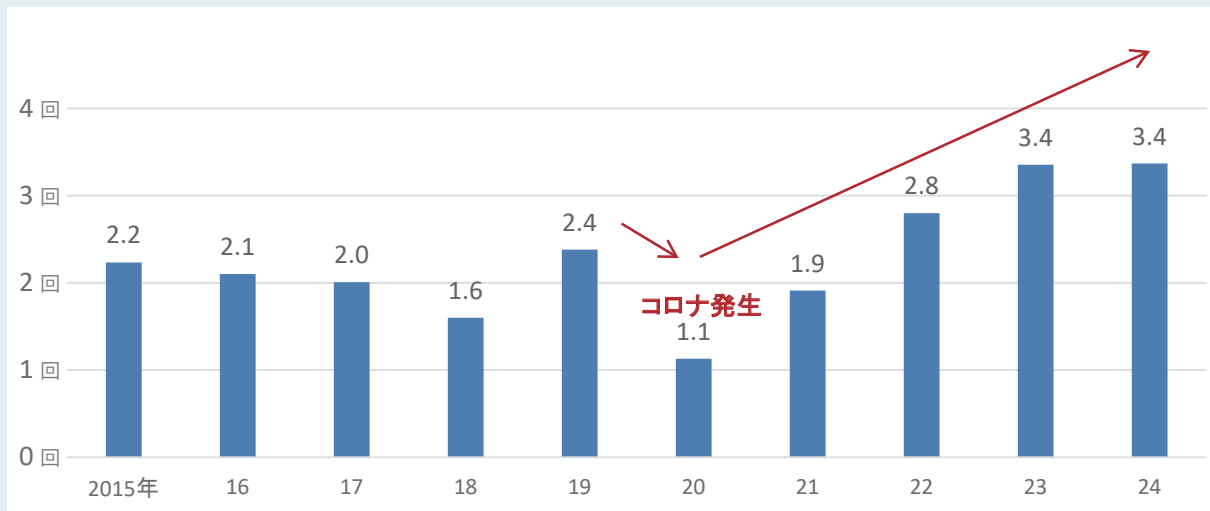
■南三陸町社会福祉協議会「ほっとバンク」事業の登録者数及びその対人口比の推移

「ほっとバンク」事業は、東日本大震災を経験した被災者が当事者性を持って見守りを行い、支援員という立場を離れた後も普段の関わりでの延長線上にある気づきを、無償の個人ボランティアとして「無理なく、楽しく、長続き」するように行うための取組。登録者数は事業開始時（2015年）の81人から直近では240人近くに上り、ほぼ一貫して増加している。また、それと軌を一として、町民全体に占める登録者数の割合も当初の1%未満から2%程度に高まっている。



■「ほっとバンク」事業の登録者一人当たりの年間平均活動回数の推移

「ほっとバンク」事業の年間の延べ活動者数を各年の登録者数で除することにより、年間の登録者一人当たり平均活動回数を算定することができる。その推移を見ると、ほっとバンク開始から2019年までは概ね2回程度で推移していたが、2020年にコロナ禍により1回強へと落ち込んだ。しかし、翌年からは増加基調に転じ、2023年以降は3回を超える水準に達している。



自然の中で草刈りコミュニティ



伝承館で防災ワーク



自分の時間を地域のために、
わいわい障子貼り

■「ほっとバンク」事業の主な活動内容

各年における「ほっとバンク」事業の主な活動内容を見ると、復興の進展等に応じて内容を変えつつ、多種多様な地域のニーズに対応していることが判る。なお、例えば障害児支援や託児ボランティア、院内ボランティアなどは地域の実情の理解や医療・福祉関連の知識などを要し、町外からの一時的なボランティアには任せづらい面がある。「ほっとバンク」は町民の主体性をベースにしているがゆえにそうしたハードルにも応えることができている。

また、近年では公園除草・園芸といった町の美化・景観づくりや、研修といった町民の学び合いなどにも対応している。

	主な活動内容
2015年	障害児支援・イベントスタッフ補助・院内ボランティア・地域内見守り 等
16	地域交流&介護教室・障害児支援・イベントスタッフ補助・研修会 等
17	託児ボランティア・イベントスタッフ補助・研修会・地域内見守り 等
18	託児ボランティア・イベントスタッフ補助・研修会・地域内見守り 等
19	託児ボランティア・イベントスタッフ補助・研修会・地域内見守り 等
20	社協イベントスタッフ・こころパックプロジェクト・園芸・研修会 等
21	猫への給餌・研修会・社協イベントスタッフ・備品整備 等
22	社協イベントスタッフ・震災復興祈念公園除草作業・園芸・研修会 等
23	社協イベントスタッフ・震災復興祈念公園除草作業・園芸・研修会 等
24	社協イベントスタッフ・震災復興祈念公園除草作業・園芸・研修会 等

■ おわりに。『みんなの想いを乗せたことばたち』

～知見を活かし、社協の枠を広げた実践～

社会福祉法人 南三陸町社会福祉協議会 事務局長 高橋 吏佳

◇存在意義

どん底から先の見えない毎日が始まり、目の前に居る住民も職員も希望を失っていた15年前。「生きてくれてありがとう。」そんな言葉を掛け合い、今できることをがむしゃらに過ごしてきた。私にとってこれまでの『いわゆる福祉』の対象は『困っている人』、それが全ての町民に及んだ東日本大震災であり、社協として社協の役割を見直し、住民に見える・魅せる社協の必要性を改めて痛感した。同時に気付いた時から行動することも多くの出会いから学ぶことになる。

…私が今ここに居る意味を問い、自分に出来る事をやり切ると誓う…

◇レジリエンス

前述の職員手記で触れたように、関わった多くの職員は「地域住民」、しかも「被災者」であった。被災者が被災者を支援するピアな関係から生まれる信頼、時にその重圧に押し潰されそうになるハートを職員間で慰撫し合い、鼓舞しながら逞しく成長してきた。この事業に関わった職員全てが町の復興に欠かせない存在であったこと、社協活動に息を吹き返す契機を与えたこと、何よりも混乱状態の住民に時間を掛けながら心を包んでいったことは、地域住民の卓越した術であったと感じる。

…震災後の社協と住民による「双方向」の関係性と過程により、前を向き生きていく原動力を手に入れた…



石川県内社協の仲間たちと

◇みながり

私が社協に入職し今年で34年を迎える、人生の半分以上が社協(笑)。業務は個々の責任において行うのが基本だが、孤立とは違い、職種を越え、職員間で話し合い笑い合い泣き合える仲間がいて、地域に育てられてきた。越えられない困難は無い、超えることが出来るから試練があり、長い間ここに居ることが出来たと確信する。

震災を経て、多くの人の手を借り、心が震えるような感謝を体感してきた。後に住民も社協もとにかく前に進もうと歩み、いつしか自分達の町を自分達で盛り上げたい!というエンパワメントの共有に。それが『ほっとバンク』の原点である。

…“とにかくみんなで作ろうよ!”みながかりは南三陸町のスタンダード…

◇顔の見える黒子

自分の町が大きな震災により壊滅し、その後の未来を創造する過程に「みながり」があり、各々の役割の先にある“未来”に向け奮闘してきた。地域を育て創るのは住民力、その住民に役割という名の光を当て一緒に推進していくのが社協であり、住民が意欲的に活動出来るようパートナーシップを意識し、更には関わった住民が能動的に行動できるよう寄り添うことが大切。一見手間と考えがちだが、この過程を大事に出来る社協は住民を向いて仕事が出来ている本物の社協だと思う。

…ただ黒子になるのは勿体ない、社協の存在を認識してもらおうことも住民の心理的安全性の向上につながる…



ほっとバンクメンバーとご近所さん、ほっこりな後ろ姿



ママも子どもも笑顔でイベントに参加



園児との交流、「めんこいな〜」



今日のみんな食堂も楽しみ〜

◇笑う門にはふくしがあつた

被災者支援事業は復興の枠組みで実施することが定義だったが、元来社協DNAが濃厚な自分にとって、違和感が大きかったのも事実。復興支援の基盤は地域福祉であり、この母体があって初めて復興の形が見えるのではないかと、予算の枠組みだけで色分けされては困るというのが現場の声。

それでも住民に本来の楽しみや笑いを届けたく、手を変え品を変え、誰もが役割を持てる仕掛け創りを実践し続けた。特に意識したのは、職員が自ら楽しんで魅せることで、おのずと住民や企業、関係機関をも巻き込むことに。共に地域を創造する意識合わせが可能になった。

…笑顔のあるところに人は寄る、世代や属性を越えたつながりがここに…

◇フェーズフリー（備えない防災）

防災や減災というワードは今や幼児期から学習できる環境がある。私が震災を経験し改めて考えるのは、日常と非日常をシームレスにすることの大切さ、防災を特別なものとせず普通の生活に馴染ませることが、今後の暮らしにおいて大切な視点と考える。災害大国日本は、いつ起こるか分からない災害への備えに向け、非常事態が起きた時に平時を出せるような日常創りが必要となる。これは物質的な備え・蓄えに限らず、社協が掲げる人と人とのつながりにも大いに有効であり、小さな自治体ほどお隣さんや集落の力が活かされるもの。だから社協は地域づくりを全力でやる、やらなきゃいけない。

…日常の関わりは非日常を優しく包む、これほどのリアリティがありますか…

◇生きる力を育て合う

人口減だ、少子高齢化だと危機的状況を耳にする。高齢者の平均寿命が延び、健康寿命の延命に策を講じ、地域の支え合いによる包括的支援体制整備事業が推進され、いずれは身寄りのない方へのサポートを社協等の事業として位置付けられる。まさに大変な世の中なのかもしれない。

しかし、どんなことがあっても、変遷する課題に対し、困っている住民と共に向き合い解決への道のりを共有する社協であり続けたいと思う、それが被災者支援活動を通し改めて感じた住民目線の本質だと信じている。

地域住民は、震災によりみながかりで乗り越えた同士でありパートナー、子どもでも大人でも互いに学びあう意義は大きい。私はこの場所でこの小さな町で暮らす住民が相互に育て合える環境をこれからも守り続けていきたい。

…生きる力を育て合うことは、福祉共育の醍醐味…



参考資料：「仕組み」の日常運用と使用アイテム

ここでは、地域福祉を通じて復興を進める取組として、三陸町社会福祉協議会が実際に日々どういったルーティンで活動してきたのか、また現場でどういったフォーマットを用いて活動記録や関係者間の情報共有や意思統一を図ってきたのかを、具体的にご紹介します。前段でご説明した“仕組み”は、こうしたルーティンやフォーマットを現場で具体的に作り込み、運用し、継続活用することではじめて効果を発揮します。ぜひ各地の復興現場で、また地域福祉の実践において参考にいただければと思います。

■被災者支援事業・生活支援員1日 ～基本的なルーティンワーク～

発災から間もない2011年7月から、年間365日、毎朝、支援員同士のミーティング(カンファレンス)を欠かさず持ちながら、下記のルーティンワークを継続しました。

時間	内容
8:30	出勤
9:00～10:00	本部事務所にて朝ミーティング(サテライト職員は交代で出席)・内部情報共有
10:00～12:00	個別訪問活動・地域支援活動支援、体操、クラブ活動支援等
13:00～13:30	サテライトミーティング(朝ミーティング報告)
13:30～16:00	個別訪問活動・地域支援活動、体操、クラブ活動支援等、関係機関との情報共有支援会議等
16:15～17:00	活動記録・内部情報共有・事業企画・課題整理等
17:15	退勤

■訪問経過表

支援している被災者お一人お一人とどのように接し、どういう相談を受け、どう対応したかを時系列で切れ目なく記録するものです。

2012/06/27 改定

No. _____ (家族構成)

訪 問 経 過 表

対象者氏名	(才)		
仮説団地・番号 (みなしの場合住所)		電話番号	

年月日(曜)時間	誰からの情報か	状 況	支援員の対応/町への相談事項

南三陸社会福祉協議会 被災者生活支援センター 0226-29-6452

■報告用フォーマット

町内の地区ごとに、担当の民生委員・児童委員と社会福祉協議会の支援員とが気がかりな被災者等に関する個別的な情報を共有し、必要な連携に繋げていくためのものです。

()地区民生委員児童委員情報交換会(サテライト)
実施日 平成 年 月 日()開催時間 : ~ :

対象者	情報源	情報/協議内容
仮設名 氏名		
年齢 家族構成		
仮設名 氏名		
年齢 家族構成		
仮設名 氏名		
年齢 家族構成		
仮設名 氏名		
年齢 家族構成		
仮設名 氏名		
年齢 家族構成		
仮設名 氏名		
年齢 家族構成		
仮設名 氏名		
年齢 家族構成		
仮設名 氏名		
年齢 家族構成		
仮設名 氏名		
年齢 家族構成		
仮設名 氏名		
年齢 家族構成		
仮設名 氏名		
年齢 家族構成		
仮設名 氏名		
年齢 家族構成		


次回は 平成 年 月 日() 13:30~

■LSAケーススタディ様式

支援現場における個別課題の実態・実情(ケース)を的確に把握しながら、LSAが適切にPDCAを日々繰り返していくための基礎情報を記録するものです。

L S A ・ ケーススタディ (平成・令和 年 月 日)

報告者 所属 _____ 氏名 _____

表 題 (事例の端的な表現)	
事例検討の課題 (事例に対して何をしたいのか、何が疑問なのか) ←最も重要な項目 (問い)	
①	
②	
③	
④	
事例の概要 (客観的事実を記載する) 地区 (団地) / 組織・団体	
	
考 察 (この事例で学んだこと、活かしたい内容) ←自分なりの答え	
①	
②	
③	
④	

「笑う門にはふくしあり」

-- みんなの笑顔とともにこのことばを伝えたい



■制作協力・みながかりメンバー

NO	所属・職名	氏名
1	南三陸町・町長	千葉 啓
2	地域福祉研究所・主宰主任研究員	本間 照雄
3	南三陸町社会福祉協議会・会長	佐藤 徳憲
4	南三陸町社会福祉協議会・事務局長	高橋 史佳
5	南三陸町社会福祉協議会総務課・総務係・主事兼主任 CSW	吉田 透
6	南三陸町社会福祉協議会総務課・総務係・主事兼 CSW	阿部 ユリヤ
7	南三陸町社会福祉協議会総務課・地域福祉係・主事兼 LSA	芳賀 裕子
8	南三陸町社会福祉協議会総務課・総務係・CSW	佐藤 美由紀
9	南三陸町社会福祉協議会総務課・総務係・CSW	千葉 幸恵
10	南三陸町社会福祉協議会総務課・地域福祉係・CSW	佐藤 美保
11	南三陸町社会福祉協議会総務課・地域福祉係・SC	千葉 ユミ
12	南三陸町社会福祉協議会総務課・地域福祉係・SC 兼 CSW	高橋 信子
13	南三陸町社会福祉協議会総務課・地域福祉係・SC 兼 CSW	遠藤 ゆかり
14	南三陸町社会福祉協議会総務課・地域福祉係・LSA	阿部 福美
15	南三陸町社会福祉協議会総務課・地域福祉係・LSA	梶原 知子
16	南三陸町社会福祉協議会総務課・地域福祉係・LSA	三浦 美江
17	南三陸町社会福祉協議会総務課・地域福祉係・LSA	佐藤 直美
18	南三陸町社会福祉協議会総務課・総務係・事務員	三浦 真悦
19	南三陸町社会福祉協議会総務課・地域福祉係・CW	千葉 茜
20	南三陸町社会福祉協議会介護福祉課・全職員	
21	南三陸町社会福祉協議会応援団！東京・広島チームのみなさん	

南三陸町社会福祉協議会は、住民みなさんの力と関係機関のご助言を頂き復興への歩みを進めて参りました。

15年という時間が経過しましたが、これからも地域の力を共に育み、地域創りを全力で楽しみます。
 本会の被災者支援事業に関わった多くのみなさまに、この場をお借りし、心より感謝と御礼を申し上げます。
 これからも「みながかり」で！



笑う門には
ふくしあり



発行者：社会福祉法人 南三陸町社会福祉協議会
(所在地) 〒986-0725 宮城県本吉郡南三陸町志津川字沼田 14-3
総合ケアセンター南三陸 2 階
(電 話) 0226-46-4516
発行日：令和 8 年 3 月 11 日
協 力：株式会社リベルタス・コンサルティング (企画・編集)
株式会社サンワ (デザイン・印刷製本)

